

<臨床医学教室>

第一内科学教室

1978年（昭和53年）7月近藤元治教授就任以来、近藤教授の方針でそれまでの内分泌・糖尿病のみの教室から、消化器・膠原病・神経・血液・心臓病・呼吸器のすべての臨床面がカバーできるスタッフを揃え、generalのわかる医師の養成と、常に患者の全身管理ができる内科学教室に変身した。研究部門も、従来よりの糖尿病・肥満・内分泌研究グループに加え、消化器およびフリーラジカルを中心とする炎症研究グループ、補体やリウマチ病研究を中心とした免疫グループ、癌研究グループ、神経・血液・心臓・呼吸器グループに増えた。「好きなことをどんどんやれ」の近藤教授のモットーのもとに、毎年多くの海外留学生を送り出し、研究成果は上昇の一途をたどっている。

消化器・フリーラジカルグループは、当初福本圭志元講師や杉野 成助教授の努力で臨床面を固めた後、現在では吉川敏一助教授・吉田憲正講師を中心に60人のメンバーからなる1内最大グループに発展している。内視鏡的診断・治療のみならず、補体・血液凝固・線溶面からのアプローチ、さらには、炎症を中心に活性酸素・フリーラジカル・サイトカイン・細胞接着分子へと研究テーマを広げ、現在までに原著、総説、著書は800を超える業績をあげ、国内のみならず海外でもその評価は高く、関連学会での特別講演・シンポジウムやワークショップの常連でもある。現在までに、第47回日本消化器病学会近畿地方会（S62）、第12回日本過酸化脂質・フリーラジカル学会（S63）、第13回日本炎症学会（H4）、第33回日本消化器免疫学会（H8）などを主催している。

斬新的な研究で国内外で名を知られるのが、肥満・糖尿病・内分泌グループの吉田俊秀講師を中心とするグループである。彼らは、痩せるための受容体である β_3 アドレナリン受容体の研究を15年以上も続けており、この遺伝子変異が日本人には特に3人に1人以上の高頻度で存在すること、糖尿病の早期発症と関連すること、網膜症・腎症の新マーカーになること、痩せにくさと関連すること、さらには、肥満の特効薬として期待される β_3 アゴニストの開発研究に関し、世界に先駆け一流国際誌に数多く発表しており、日本肥満学会のみならず、日本内分泌学会・日本糖尿病学会・日本内科学会などのシンポジストとして活躍中である。

癌研究グループは加藤治樹講師を中心とし、生理活性物質等の癌免疫療法や制癌剤の副作用防止を研究している。

リウマチ病研究グループは佐野 統講師を中心にCRHとリウマチの関係を積極的に研究しており、一流専門雑誌へ投稿された論文の世界的評価は高い。第3回日本リウマチ学会近畿支



近藤元治教授開講20周年特別記念講演会・祝賀会

部学術集会（H5）を主催している。

糖尿病グループは金網隆弘元助教や中埜孝治元講師を中心に糖尿病の成因の免疫学的解明、糖尿病性腎症など合併症解明のための研究を長年にわたり行い、最近では、中村直登講師、繁田浩史助手が後を引き継ぎ研究中である。第29回日本糖尿病学会近畿地方会（H4）を主催している。

補体研究グループは竹村周平講師を中心に小野寺秀記助手が凝固・線溶と補体：補体 cold activation：補体レセプター：補体制御膜蛋白の研究に情熱を注いでおり、臨床面では膠原病治療や患者指導の中心になっている。第18回補体シンポジウム（S56）、第1回臨床補体カンファレンス（S61）、第12回国際補体ワークショップ（H5）、第1回臨床補体 in 京都（H8）を主催している。

血液グループは顕微蛍光測光により細胞個々の形態とその細胞の持つ種々の物質の定量を主課題に研究を行っており、最近では小林 裕助手の努力で末梢血幹細胞移植の導入までに研究レベルは上昇している。第38回近畿血液学地方会（S57）を主催している。

神経グループは近藤内科誕生後、山口恭平元講師が臨床検査部より招かれて、神経グループの中心となり、近藤内科誕生後の1内全体の臨床の要として活躍された。その後、高梨芳彰（現本学神経内科助教授）や竹上 徹講師が加わり、電気生理学的研究が盛んになったが、老化研神経内科の発足により大半は老化研へ移籍し、現在は竹上講師のみ洛東病院にて臨床研究を続けている。

循環器グループは臨床面をカバーするためにできた面があり、当初は検査を施行するにもスペースも検査枠もなく苦労があった。しかし小田洋平助手の努力もあり、現在ではほとんどの臨床検査や Intervention でも臨床で貢献している。最近では研究面でも充実してきてポジトロ

ンCTを用いた臨床研究を国際学会にて発表するまでになっている。

この他、教室では第117回日本内科学会近畿地方会（S60）も主催している。

なお、当教室ではインフォームド・コンセントや痛告知に早くから取り組み、末期癌患者の緩和医療について心のこもった患者ケアをおこなっている。また、医療関係者や一般へのエイズ教育の京都における中心でもある。

（文責 近藤元治，吉田俊秀）

1978年（昭和53年）	3月	教授（第一内科学教室）吉田秀雄が停年退職し、名誉教授に推薦された（4月）。
1978年（昭和53年）	7月	講師（学内）近藤元治（本学昭和38年卒業）が教授（第一内科学教室）に任ぜられる。
1981年（昭和56年）	4月	講師金網隆弘（本学昭和37年卒業）が助教授（第一内科学教室）に任ぜられる。
1989年（平成元年）	3月	助教授金網隆弘（第一内科学教室）が退職した。
1989年（平成元年）	5月	講師（第一内科学教室）杉野 成（本学昭和44年卒業）が助教授（第一内科学教室）に任ぜられる。
1989年（平成元年）	7月	教授（第一内科学教室）近藤元治が附属図書館長に任ぜられる。
1993年（平成5年）	4月	教授（第一内科学教室）近藤元治が附属病院長兼附属小児疾患研究施設長に任ぜられる。
1995年（平成7年）	4月	助教授（第一内科学教室）杉野 成が綾部保健所長（助教授併任）に任ぜられる。
1995年（平成7年）	4月	講師（第一内科学教室）吉川敏一（本学昭和48年卒業）が助教授（第一内科学教室）に任ぜられる。
1997年（平成9年）	4月	教授（第一内科学教室）近藤元治が附属病院長兼附属小児疾患研究施設長に任ぜられる。

第二内科学教室

あゆみ

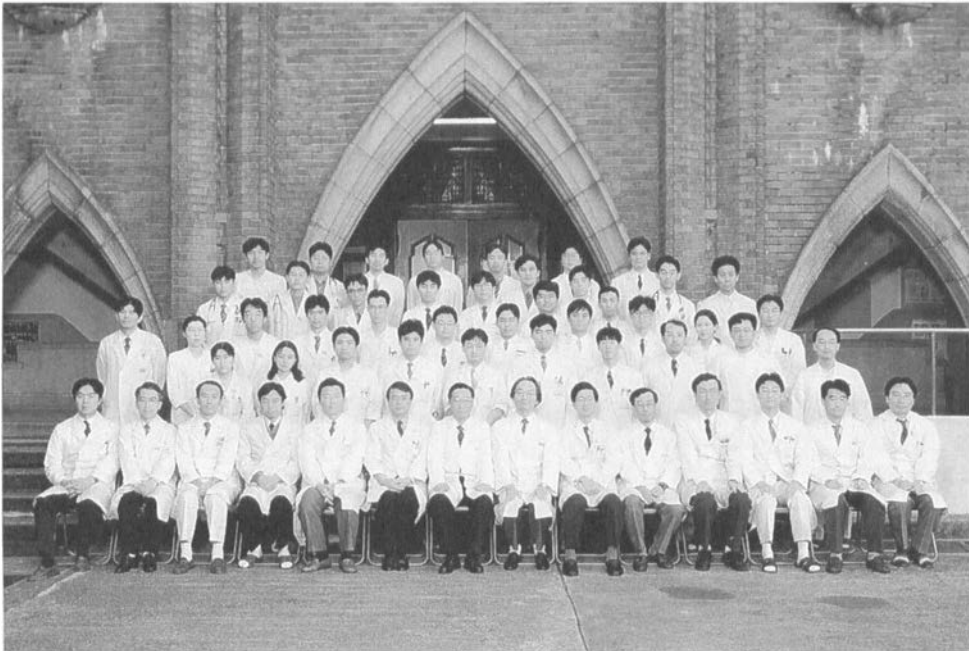
本学の内科学教室の歴史は1873年(明治6年)、長崎の精得館出身の半井 澄が京都療病院内科担当医師として就任した時に始まる。

1896年（明治29年）内科の第一部・第二部への分割に伴い教諭平井毓太郎が初代の内科第二部長に就任する。しかし、その後も内科の統合，分割が行われ，その間小川磋五郎，浅山忠愛が内科第二部長となる。1943年（昭和8年）には細田 孟が教授となり，1956年（昭和31年）には内科が現在の形態のごとく三講座に分離独立した。その後，丸本 晋（昭和34年就任）と続き，本学が創立100周年記念を迎えた翌年の1993年（昭和48年）に伊地知濱夫教授が就任，1987年（昭和62年）より中川雅夫教授が引き継ぎ現在に至っている。また，歴代の第二内科教授はこれまで例外無く学長あるいは病院長を務め，昭和48年以降では伊地知教授が昭和58年から，

また平成7年からは中川教授がそれぞれ2年間病院長を兼任している。中川教授の病院長就任中の平成8年には本学附属病院が高度先進医療の特定機能病院指定を受けたことは記憶に新しい。

第二内科の学生教育は従来より系統講義において各学生にテーマを与えることにより講義への積極的な参加を促し、実習の学生には医療の現場を体感させ、診断から治療に至るまでのプロセスを自分で考える機会を与えている。また、研修医教育に関しては複数の指導医によるマンツーマン指導体制をとり、各専門医によるカンファレンスに加え、関連病院の協力を得て救急医療を含めた医療技術の習得ができる体制をとっている。昭和48年以降、毎年17人前後の入局者があり、本学卒業生を中心に北は北海道大学から南は鹿児島大学まで、全国から延べ429人の入局者を迎えている。現在、教職員29名、大学院生17名、修練医15名、研修医32名および多数の客員講師、研修員を擁する大きな教室となっている。

第二内科の専門診療分野は循環器病を中心に血液疾患、呼吸器疾患、消化器病、腎疾患、内分泌疾患と多岐にわたる。昭和50年代の初頭から科学技術の進歩は医療にも急速に浸透し、循環器部門では、1974年（昭和49年）より冠動脈造影を始め、1984年（昭和59年）からは冠動脈再建術も開始して、再建術症例は800例を越える。また、1993年（平成5年）より難治性不整脈に対してカテーテルアブレーション治療を開始し、これまでの症例は約80例を数えている。血液疾患では、



第二内科学教室（平成7年11月撮影）

1991年（平成3年）から末梢血幹細胞移植，1993年（平成5年）から骨髄移植を開始し，それぞれ70数例，10数例の治療を行った。呼吸器疾患ではこれまで長期予後の不良であった肺小細胞癌に対して1993年（平成5年）に末梢血幹細胞移植を併用した大量化学療法を開発し，めざましい成果を上げている。しかし，このように高度に専門細分化した医療を進めることにより，全人的医療が軽視されることは決して許されず，第二内科ではこれらを統合し general の基盤にたった専門医療を目指すことをその診療理念の根幹としている。

第二内科の研究分野も開講当初は生化学的手法を用いた腎障害時の蛋白代謝および血漿蛋白化学と病態に関するものが主流を占めていたが，昭和50年代にはいって循環器病，血液病，呼吸器病，動脈硬化，血栓止血と多岐にわたり，さらに昭和60年代からはそれぞれの分野に分子生物学的手法が導入され現在に至る。この間，循環器病学では心筋の生化学的および生理学的研究，心筋症モデルラットの確立とその成因の解明，核医学的アプローチ，不整脈の成因と治療，高血圧症の成因の中枢性機序，高血圧における冠循環および内皮機能障害等に関し研究を続けてきた。また，血栓と止血機序の研究領域では1975年（昭和50年）血栓多発家系の本邦第1例目を発見し，現在分子生物学的手法を用いた研究が進められている。1982年（昭和57年）に確立したヒト臍帯静脈内皮細胞の培養系を用いた動脈硬化の発症機構に関する研究も進んでいる。血液病学では一貫して白血病の治療に関する研究に取り組み，昭和60年代より多発性骨髄腫の病態と治療に関する研究に着手し，SCID マウスを用いたヒト骨髄腫モデルの作成に成功した。また，平成元年からは末梢血幹細胞移植の基礎的研究を開始，2年後には自家末梢血幹細胞移植が臨床応用されるに至った。呼吸器病学では，肺癌，喘息およびARDSの成因と治療に関し研究を続けている。

研究の国際化に伴い英文論文も年々増加して近年は年間40編前後の英文論文が発行され，昭和48年以降の累計は660編以上を数えている。この間，米国はもとより，英国，イタリア，フランス，ドイツ，カナダ等で多数の教室員が留学して海外での研究に従事し，現在もハイデルベルグ大学，スタンフォード大学，ハーバード大学等に留学中である。逆に第二内科へは米国，ドイツ，中国等から客員教授や留学生を迎えてきた。

国内でも屈指の歴史を持つ第二内科学教室は過去25年間のあいだ，伊地知教授，中川教授の指導のもと，数の上でも質の上でも堅実な発展を遂げてきた。しかし，近い将来訪れる超高齢化社会においても循環器病学を中心とする当教室への需要と期待は更に高まることが予想され，その責任はこれまで以上に重大である。組織が巨大化，多角化しても，各診療・研究グループは開拓者精神と挑戦心を忘れず，互いに協調し，かつ切磋琢磨し，教育，診療，研究面での21世紀に向けた新たな展開を図らなければならない。

（文責 佐々木 享）

1973年 (昭和48年)	4月	丸本 晋名誉教授洛東病院院長
1985年 (昭和60年)	7月	丸本 晋名誉教授死去
1973年 (昭和48年)	9月	伊地知濱夫教授就任
1983年 (昭和58年)	4月	伊地知濱夫京都府立医科大学附属病院院長
1983年 (昭和58年)	4月	伊地知濱夫与謝の海病院院長
1987年 (昭和62年)	3月	伊地知濱夫教授退任
1987年 (昭和62年)	4月	伊地知濱夫名誉教授
1987年 (昭和62年)	4月	伊地知濱夫日本パプテスト病院院長
1974年 (昭和49年)	6月	仁木偉麿夫教授就任
1974年 (昭和49年)	6月	仁木偉麿夫教授退任
1974年 (昭和49年)	6月	仁木偉麿夫国立八日市病院院長
1979年 (昭和54年)	4月	中川雅夫助教授就任
1987年 (昭和62年)	8月	中川雅夫教授就任
1994年 (平成6年)	4月	中川雅夫医療センター所長
1995年 (平成7年)	4月	中川雅夫京都府立医科大学附属病院院長
1973年 (昭和48年)	8月	杉島聖章助教授就任 (併任) 洛東病院副院長
1975年 (昭和50年)	11月	杉島聖章助教授就任
1978年 (昭和53年)	3月	杉島聖章退職
1978年 (昭和53年)	4月	杉島聖章明石市立市民病院内科医長
1974年 (昭和49年)	6月	越智幸男助教授就任
1976年 (昭和51年)	3月	越智幸男退職
1976年 (昭和51年)	4月	越智幸男滋賀医科大学第二内科助教授
1982年 (昭和57年)	12月	越智幸男滋賀医科大学臨床検査部長
1973年 (昭和48年)	4月	三品頼甫助教授 (併任)
1978年 (昭和53年)	12月	三品頼甫死去
1978年 (昭和53年)	5月	落合正和助教授 (併任)
1997年 (平成9年)	4月	落合正和京都府立洛東病院院長
1978年 (昭和53年)	5月	松岡謙二助教授
1979年 (昭和54年)	3月	松岡謙二助教授 (併任) 与謝の海病院副院長
1983年 (昭和58年)	3月	松岡謙二退職
1983年 (昭和58年)	4月	松岡謙二財団法人関西労働保健協会
1988年 (昭和63年)	4月	勝目 紘助教授就任
1992年 (平成4年)	3月	勝目 紘退職
1992年 (平成4年)	4月	朝山 純助教授就任
1996年 (平成8年)	3月	朝山 純退職
1996年 (平成8年)	4月	朝山 純国立療養所青野原病院院長
1996年 (平成8年)	4月	武田和夫助教授就任

第三内科学教室

第三内科の変遷

[構成員]

1973年は医局員178名、同門会員284名。その後、74年川井啓市が公衆衛生学教授、76年細田

一郎が滋賀医大第二内科教授，78年近藤元治が第一内科教授，79年増田正典教授が定年退官し続いて瀧野辰郎が教授に就任した。増田の国内外での活躍はめざましく第三内科を日本を代表する内科学教室に築き上げた。81年藤木典生が福井医大第二内科教授，86年阿部達生が衛生学教授に就任した。瀧野教授就任時医局員163名，89年加嶋敬教授就任時医局員319名，97年5月現在医局員420名，同門会員561名で，併任も含めて教室スタッフは21人である。

[研究]

73年は増田教授の全盛時代で，肝臓，消化吸収，糖尿病，血液培養，免疫血液，内視鏡，循環器，臨床神経班が存在した。近藤元治が第一内科教授就任後に免疫血液は縮小し，臨床神経班は平成2年老年内科の新設に伴いそちらに移動した。免疫血液班では細川計明，近藤らにより消化器疾患における補体の意義や抗プラスミン治療で多くの業績を挙げた。神経班は松村睦郎，荒木邦治らが責任者として活躍した。97年現在，教室には，1) 消化吸収，2) 肝臓，3) 内視鏡，4) 血液培養，5) 循環器，6) 糖尿病の6研究班がある。

1) は細田前滋賀医大教授，加嶋敬教授，馬場忠雄滋賀医大教授（細田の後任）の専門領域で，臨床研究として膵疾患，炎症性腸疾患，消化吸収不良症候群の診断・治療・病態解析を継続している。基礎研究は膵外分泌調節機構，脂質・脂肪酸の腸管吸収，腸膵相関で，消化吸収試験では我が国での先駆者として高く評価されている。89年以降は加嶋教授，片岡慶正を中心に膵炎の発症・進展・重症化機序の解析を進め，レセプター，細胞内情報伝達系，消化管ホルモンの動態，血流，サイトカイン，アポトーシスの研究を行っている。膵炎治療では選択性CCK受容体拮抗薬や高力価膵酵素剤を研究中で，膵炎研究ではわが国の中心的存在である。

2) は増田，瀧野両教授の専門分野で日本肝臓学会西部会の事務局が教室にある。73年頃は瀧野らによる電子顕微鏡を用いた研究が主で，教授就任後は高橋示人助教授，その後，奥野忠雄講師が責任者となりウイルス性肝炎，アルコール性肝障害，肝癌，胆汁酸研究へと拡大した。瀧野は厚生省難治性肝疾患治療分科会会長も務め，国際的にも活躍した。岡上は83年から文部省科学研究費の補助で新しい研究分野である細胞骨格病理を開拓した。89年以降は岡上武助教授が責任者で，肝炎ウイルスの遺伝子変異，肝癌の遺伝子組み込み，発癌過程の癌遺伝子変化，アルコール性肝障害，肝類洞壁細胞の研究で多くの成果を挙げ，国際的にも評価された。80年より肝発癌過程の核酸の変化や胆汁酸の研究が始まり，DNA ploidy patternの研究，異常胆汁酸の発見，ESR，NMRを用いた肝のエネルギー代謝の研究を続け，95年には肝癌の遺伝子治療の研究もスタートした。

3) は川井啓市（前公衆衛生学教授）らにより，胃十二指腸潰瘍の診断や経過観察，胃癌，大腸疾患，膵疾患の診断を，その後，郡大裕が，80年に児玉正が責任者になった。内視鏡機器の発達に伴い，レーザー，マイクロ波による早期胃癌，大腸ポリープ切除，食道静脈瘤硬化療法，胆石の内視鏡下の排石術が始まり，機器の開発も行ってきた。基礎的研究は，10年程前か



第3内科医局会症例検討会（平成10年）

ら消化管運動機能解析，実験潰瘍の発生と治癒過程の研究，消化管腫瘍病理学を，95年からはヘリコバクターピロリ（HP）の研究を行い，PCRによるHP検出，胃炎，潰瘍，胃癌との関連性をサイトカインの面から研究し，多くの成果を挙げた。

4）は阿部達生（現衛生学教授）が責任者になってからは癌と造血器腫瘍の化学療法を行ってきた。阿部により73年に染色体クロマチンの分子構造の研究，78年に造血器幹細胞の培養と幹細胞移植術の研究が始まり，86年に三澤信一講師が責任者となり，衛生学阿部教授らと共同研究で88年から造血器腫瘍と癌の分子細胞遺伝学へとさらに発展し，微小残存クローンの研究など遺伝子工学を駆使した研究が盛んとなった。谷脇雅史がFISHを研究に導入し，癌，白血病，悪性リンパ腫の研究で多くの者が国際的に高く評価される成果を挙げた。97年には三澤講師のあと谷脇講師が責任者となった。

5）は高梨忠寛，辻村吉紀，森川淳一郎へと責任者は変わり，一貫して心筋電気生理学の研究を行い，87年頃より臨床検査医学教室とも共同研究し心筋細胞の電気活動，その後コンピューターを用いた心電図研究を行い多くの成果を挙げた。

6）は金網隆弘，中林富雄，千丸博司らにより肝疾患の糖代謝異常を種々の面から研究し多くの成果を挙げ，最近は糖尿病患者の好中球機能の解析などを行っている。

1974年（昭和49年）	12月	京都府立与謝の海病院第一内科医長辻俊三が併任で第三内科助教授に就任。
1979年（昭和54年）	3月	増田正典教授が定年退官。
1979年（昭和54年）	4月	助教授瀧野辰郎が教授に就任。

1979年（昭和54年）	10月	阿部達生が助教授に就任。
1980年（昭和55年）	4月	高橋示人が助教授に就任。
1981年（昭和56年）	7月	助教授高橋示人が退職。
1982年（昭和57年）	11月	増田正典名誉教授が死去。
1986年（昭和61年）	11月	助教授阿部達生が衛生学の教授に就任。
1988年（昭和63年）	4月	加嶋敬が助教授に就任。
1988年（昭和63年）	7月	教授瀧野辰郎が死去。
1989年（平成元年）	8月	助教授加嶋敬が教授に就任。
1989年（平成元年）	10月	岡上武が助教授に就任。
1996年（平成8年）	3月	元教授葛谷覚元が死去。
1997年（平成9年）	3月	併任助教授（府立与謝の海病院副院長）辻俊三が定年退職。
1997年（平成9年）	4月	三澤信一が併任助教授（府立与謝の海病院副院長）に就任。

第一外科学教室

昭和48年から平成9年までの第一外科の歴史を振り返ると、それは「分化と発展の時代」であったといつて良からう。昭和48年には間島進教授と大同礼次郎助教授のもと、教室の診療と研究は消化器外科のほかに、遠山講師を中心とした脳神経外科グループ、白坂講師を中心とした小児外科グループが、それぞれ着々と成果を上げつつあった。大同助教授は昭和50年、滋賀医科大学第一外科の初代教授に赴任した。大同教授は食道を中心としたライフワークを、滋賀医大でも更に発展させたが、残念ながら昭和55年志半ばで、病のために逝去された。もし、存命であれば日本の消化器外科学界の重鎮になり得る資質の持ち主であった。昭和53年4月には脳神経外科学教室が設立され、初代教授に東京大学より平川公義先生が迎えられた。新設の脳神経外科学教室のスタッフは殆どが第一外科出身者で出発し、その後発展を続けて、昭和63年6月に平川教授が退職した後任として、平成元年3月には上田聖教授が選出された。また、昭和55年の国際児童年を記念して、京都府立医科大学附属小児疾患研究施設の設立が計画された。そして、昭和63年7月には岩井直躬助教授が、小児疾患研究施設外科学第一部門教授に就任した。小児外科学教室の発足を誰よりも喜んだのは、日本の小児外科の草創期に活躍した第一外科の萩原徹元助教授（故人）、坂部慶夫元講師、山本実元講師（故人）らであった。

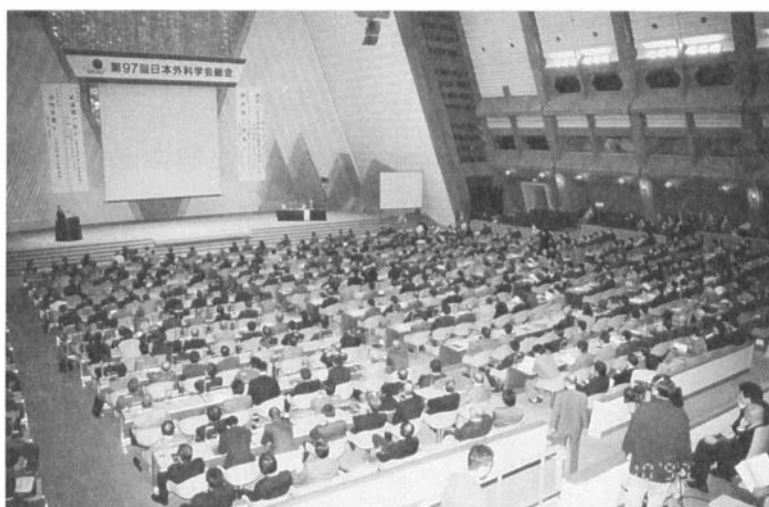
これらの一連の変化の中で、第一外科がかつての大講座から、専門性を明瞭にした教室へと分化することになった。つまり、脳神経外科と小児外科が、独立した教室として活動を開始するとともに、第一外科は消化器外科と一般外科を主体とした教室へと変身したのである。そして、間島教授のもと第一外科は業績を積み重ね、昭和50年には胃癌研究会を、そして昭和55年には日本消化器外科学会を主催した。昭和56年に間島教授は病を得て療養生活を送られたものの、不屈の精神でみごとに回復されてその職務を全うされた。

このような時機に、間島進教授の後任として着任したのは、昭和51年に弱冠40才で秋田大学

医学部第一外科教授に転出した高橋俊雄教授であった。高橋教授は消化器外科の若手教授として、秋田に於いても着々と成果を上げていたところを、引き抜かれた形で着任した。大同助教授の後任の藤田佳宏助教授は、昭和63年に国立福知山病院院長に就任し、折から吹き荒れる国立病院統廃合の嵐の中、国立福知山病院を福知山市民病院に移管するという大事を成し遂げた。藤田助教授転出のあと小島治講師が平成元年に助教授になったが、平成6年に退職し、後任に山口俊晴講師が第一外科助教授に昇格した。また沢井清司講師も手術部副部長（第一外科助教授兼任）に就任した。

高橋教授は手術一辺倒になりがちだった教室で、内視鏡検査やレントゲン透視の技術向上の重要性を説き、外来検査室を整備するとともに、すでに秋田大学では稼働して大きな成果を上げていた集中治療部（ICU）の設置に努力し、その初代部長に就任している。また、それまであまり行われていなかった肝臓外科の重要性に着目し、谷口弘毅講師を中心とした肝臓グループを育て上げた。研究の分野でも活性炭やモノクローナル抗体などを利用した、Drug Delivery Systemの研究が注目を集め膨大な業績が生み出された。そして、これに対して平成3年には高松宮妃癌研究基金学術奨励賞が授与された。また、直腸癌の放射線・温熱・5-FU座薬の3者併用療法は、局所再発を防止するとともに肛門括約筋温存手術の推進に寄与した。さらに、平成3年からは高橋教授の秋田時代の弟子の鈴木博士の指導で腹腔鏡下胆嚢摘出術を教室に導入し、いち早く今日の腹腔鏡手術の隆盛を先取りした。

平成5年4月には京都府立医科大学附属図書館館長に就任した。そして、土曜日の開館や午後8時までの閲覧時間延長など、図書館の整備に尽力した。



第97回日本外科学会総会を主催 満員の会長講演

学会に於いても、京都府立医科大学第一外科の名声は上がり、平成3年には日本消化器外科学会の理事選において高橋教授がトップ当選を果たした。さらに、平成4年には日本外科学会理事に当選し、副会長を経て平成8年4月に会長に就任し、平成9年4月に第97回日本外科学会総会を主催した。総会の会長講演では先々代の峯勝教授の考案した消化管自動吻合器こそ、現在世界を席卷している自動吻合器のオリジナルであることが紹介された。この総会の出席者は従来まで最高で8000人であったが、高橋教授の主催の時には1万人を越え、空前絶後の日本外科学会と関係者にいわしめたほどの盛会であった。また、平成8年12月には日本癌学会会長に就任し、平成9年9月に開催された第56回日本癌学会総会を主催した。癌学会も総会史上最多の演題数が集まり、盛会のうちに終了した。日本外科学会も日本癌学会も125年の歴史を誇る本学でも未だ主催した者はなく、本学の歴史に残る快挙といえる。学会はその他に第4回日本DDS学会、第17回日本リンパ学会を主催した。平成9年には日本DDS学会の理事長に就任した。国際的にも、UICC（国際対癌連合）のシンポジウムを京都で開催したほか、第一回の国際胃癌会議の組織委員長を務め、IGCA（国際胃癌学会）の設立に尽力して、IGCAの初代事務局長に就任した。

高橋教授を中心とした胃癌研究会のメンバーにより、平成9年1月には日本胃癌学会が設立され、その事務局が京都府立医科大学第一外科に設置されることになった。これも、峯教授そして間島教授と続けて胃癌を中心とした業績が第一外科で蓄積され、その結果高橋教授の時代になって華開いたととらえることができる。日本消化器外科学会の評議員選挙では、その業績が客観的に評価され全国で300名の評議員が選出される。従って、業績の無い教室では教授さえも落選する厳しい選挙である。教室では高橋教授以下6名が評議員に選出されており、この一事をもってしても第一外科学教室が消化器外科学教室としてレベルの高いことが理解できる。

1973年（昭和48年）	4月	第一外科教授：間島 進
1973年（昭和48年）	9月	第一外科助教授：大同礼次郎
1975年（昭和50年）	2月	第24回胃癌研究会主催
1975年（昭和50年）	4月	大同礼次郎助教授：滋賀医科大学第一外科教授に就任
1975年（昭和50年）	4月	第一外科助教授就任：高橋俊雄
1976年（昭和51年）	4月	秋田大学医学部第一外科学教室教授就任：高橋俊雄
1980年（昭和55年）	2月	大同礼次郎教授逝去
1980年（昭和55年）	7月	第16回日本消化器外科学会総会主催
1984年（昭和59年）	3月	間島 進教授退職、明治鍼灸大学附属病院院長就任
1984年（昭和59年）	9月	第一外科教授就任：高橋俊雄
1987年（昭和62年）	4月	明治鍼灸大学外科教授就任：咲田雅一
1988年（昭和63年）	7月	藤田佳宏助教授：国立福知山病院院長に転出
1988年（昭和63年）	7月	小児外科学教室教授就任：岩井直躬
1989年（平成元年）	3月	脳神経外科学教室教授就任：上田 聖
1989年（平成元年）	3月	第一外科助教授就任：小島 治

1990年（平成2年）	4月	高橋教授集中治療部（ICU）部長就任
1990年（平成2年）	5月	峯 勝名誉教授逝去
1991年（平成3年）	3月	高橋教授高松宮妃癌研究基金学術奨励賞受賞
1991年（平成3年）		腹腔鏡下手術導入
1993年（平成5年）	3月	国際対癌連合（UICC）シンポジウム開催
1993年（平成5年）	4月	高橋教授京都府立医科大学附属図書館長就任
1993年（平成5年）	6月	第17回日本リンパ学会総会主催
1995年（平成7年）	3月	国際胃癌学会発足（高橋教授事務局長就任）
1995年（平成7年）	5月	第一外科助教授就任：山口俊晴
1995年（平成7年）	5月	中央手術部助教授就任：沢井清司
1997年（平成9年）	1月	日本胃癌学会設立（第一外科に事務局を設置）
1997年（平成9年）	4月	日本外科学会総会開催
1997年（平成9年）	9月	日本癌学会総会開催

第二外科学教室

1973年（S48）年は、橋本勇教授が第二外科4代目教授就任後6年目、京都府立与謝の海病院院長併任後2年目となり教室全体をリードされ、渡部高久助教授（心臓血管外科）、小玉正智講師（消化器外科）、岡隆宏講師、中根佳宏学内講師（移植内分泌外科）がそれぞれの領域のリーダーとして総勢85名の教室員で診療・教育・研究に励んだ。また原智次講師（併任）は京都府衛生部医務課主査として出向し、大学と京都府の行政との橋渡しとして活躍した。1975（S50）年には橋本勇教授は京都府立医科大学附属病院長兼附属看護学院長を合わせて併任し、益々多忙な毎日となった。その中で同年4月に橋本勇教授が学会会長として第23回日本輸血学会総会を京都市にて盛大に開催した。ひき続いて、1976（S51）年メキシコ市にて第14回国際微小循環外科学会の会長として国際舞台で活躍された。

1978（S53）年9月30日に渡部高久助教授が大津市民病院の胸部外科部長として、玉利公正（S48卒）と池田識道（S48卒）と共に大津市民病院で心臓血管外科の創設のために着任し、同年10月1日より小玉正智講師が助教授に昇任した。その2年後の1981（S56）年9月に小玉正智助教授が滋賀医科大学第一外科学講座の2代目の教授として転任され京都府立医大の活躍の場の拡大に努力された。同年10月19日に第14回日本移植学会総会を橋本教授が総会会長として京都府会館にて開催した。同年1月1日に岡隆宏講師が助教授に昇任した。

1982（S57）年12月に京都府立医科大学の附属施設として小児疾患研究施設が開設され、橋本教授が外科第2部門教授を兼務し和田行雄助手が第一に任命され、先天性心疾患の外科にとり組むこととなり、翌年（1983年）4月1日から中路進講師（第二外科兼務）、佐々木義孝助手、嶋田秀逸助手、門脇政治助手、塚脇順子助手の7名のスタッフで小児心臓外科を担うこととなった。ここに心臓外科が先天性と後天性に仕事を分担して発展する基盤が成立した。

1983（S58）年4月には橋本勇教授は、西安医学院第一附属病院（中華人民共和国）において腎移植の指導のため出張した。同年6月30日に橋本勇教授は京都府立医科大学を任期4年を残して突然退職され、同年7月1日より京都第一赤十字病院院長に就任され、教室員一同は余りにも突然の出来事で啞然としたが、その後、日本移植学会理事長および日本赤十字病院長会会長の重責を歴任され大活躍をされ、学外から第2外科教室員の御指導を賜りました事に厚く謝意を申し上げます。

1983（S58）年12月1日より岡隆宏教授が第2外科5代目教授として就任。橋本先代教授の築き上げられた①移植・内分泌外科，②胸部外科（心臓血管・呼吸器），③消化器外科の三本柱をさらに発展させる形で船出をした。翌年（S59年）8月に田中承男講師が助教授に昇任し、消化器グループのHeadとして、大賀興一講師を胸部外科グループのHeadとし、相川一郎講師（学内）を移植グループのHeadとして診療・研究・教育に邁進した。

1986年（S61）年5月に田中承男助教授が大阪で唯一の関連病院である大阪鉄道病院の副院長に就任し、同病院の外科の発展に多大な寄与をされた。同年10月に大賀興一講師が助教授に昇任し、消化器外科のHeadとして与謝の海病院外科医長として出向していた山岸久一講師が帰任した。S62年4月には岡教授が伊知地濱夫第2内科教授の御退官のあとを受けて府立与謝の海病院の院長（兼任）として就任し、週1回の与謝の海と大学の双方の管理者として多忙を極める様になった。岡教授は1990（平成2）年1月に腎移植臨床研究会（参加者800名・於：大津プリンスホテル）の会長をつとめた。そして同年9月には、大森吉弘講師（与謝の海病院副院長）が助教授併任となり、与謝の海病院の他に月・火曜日に大学にて移植外科の外来診療や火



第58回日本臨床外科医学会開催 岡教授、小玉滋賀医大教授

曜日の腎移植の手術の際の摘出腎の責任者として活躍し続けております。

1991（H3）年4月には岡教授が京都府立医科大学附属病院長を兼任（H5年3月まで）し与謝の海病院と京都府立医科大学附属病院の2つの病院長を兼任するという超多忙の時代となりました。1993（H5）年3月に大賀興一助教授が第2岡本総合病院の院長として就任し、同病院の心臓血管外科の創設に努力されました。同年4月に山岸久一講師が助教授に就任し、岡教授が世話人として第14回癌免疫外科学会（出席者500名）を都ホテルで開催のマネジメントを行った。その他岡教授の学会開催は1995（H7）年9月に第31回日本移植学会を国立国際会館（出席者1500名）で、引き続き1996（H8）年10月には第58回日本臨床外科医学会総会（於：国立国際会館）で同学会で過去最多の1800題の演題と4500名の参加者を集めて盛会裡に総会会長をつとめられました。

また岡教授は1998（H10）年10月21～24日に第7回 International Alexis Carrel Conference を都ホテルで開催予定であり、鋭意準備をすすめております。

1975（S50）年	7月	橋本 勇教授 京都府立医科大学附属病院長
1978（S53）年	9月	渡部高久助教授 退職し大津市民病院胸部外科部長に就任
1978（S53）年	10月	小玉正智講師が助教授に昇進
1981（S56）年	9月	小玉正智助教授が滋賀医科大学第一外科教授に転任
1981（S56）年	11月	岡 隆宏講師が助教授に昇進
1983（S58）年	7月	橋本 勇教授 辞職され名誉教授に推薦され京都第一赤十字病院院長に就任
1983（S58）年	12月	岡 隆宏助教授が教授に昇進
1984（S59）年	8月	田中承男講師が助教授に昇進
1986（S61）年	5月	田中承男助教授が大阪鉄道病院副院長に就任
1986（S61）年	10月	大賀興一講師が助教授に昇進
1987（S62）年	4月	岡 隆宏教授が京都府立与謝の海病院院長兼任
1990（H2）年	9月	大森吉弘講師（与謝の海病院副院長）が助教授を併任
1991（H3）年	4月	岡 隆宏教授が附属病院長を兼任（H5年3月まで）
1993（H5）年	3月	大賀興一助教授が第2岡本総合病院院長に就任
1993（H5）年	4月	山岸久一講師が助教授に就任

脳神経外科学教室

所属の変遷

京都府立医科大学における近代脳神経外科の黎明は先の「京都府立医科大学100年史」にもあるところで第1外科学教室教授峯勝のもと、1961年（昭和36年）講師遠山光郎（本学昭和29年卒業）がアメリカでの留学より帰国して本格化した。これより1975年（昭和50年）3月までは第

1 外科学教室の subdivision として遠山をはじめ池田正一（本学昭和29年卒業）、福間誠之（本学昭和34年卒業）、小竹源也（本学昭和36年卒業）、竹友重信（本学昭和36年卒業）、吉川 檢（本学昭和37年卒業）、上田 聖（本学昭和38年卒業）、大町純一（本学昭和39年卒業）、久保 哲（本学昭和40年卒業）、武美寛治（本学昭和43年卒業）、成瀬昭二（本学昭和45年卒業）、山木垂水（本学昭和47年卒業）、鈴木憲三（本学昭和48年卒業）らにより、脳神経外科疾患の治療（特にこの時期より顕微鏡下の手術が導入された）、学生の教育の他、脳腫瘍の発生に関する実験的研究、脳血管れん縮に対する自律神経の関与の実験的研究、実験的水頭症における自律神経系の関与の研究などが行われていた。

1975年（昭和50年）4月脳神経外科学教室が第1外科学教室教授間島進管理のもとに開設された。事実上の教室責任者として講師遠山光郎がその任にあたった。これは本学脳神経外科学教室の記念すべき第一歩であり、本学にとっても大きな出来事であった。この時の医局構成員は講師遠山光郎、助手小竹源也、上田 聖、修練医成瀬昭二、山木垂水、鈴木憲三の合計6名であった。なお、1976年6月遠山は助教授に、同年4月小竹は講師にそれぞれ昇格した。医局、研究室もこれまでの第1外科学教室から独立し、医局、研究室用に改築された旧鴨川病棟の20号病舎に移転した。この医局は医局員の数からするとありあまるスペースがあり、さらに4階にあるため比叡山、大文字を含む東山三六峰、鴨川の四季の移り変わりを眺望できた。また他の医局や病棟とも隔離されており1年に何回か病院のスタッフを招きパーティを開催するなど実に快適なところであった（写真）。この医局は1980年（昭和55年）4月現外来診療棟6階に医局が移動するまで使用された。

1978年（昭和53年）4月、東京大学助教授平川公義（東京大学昭和34年卒業）が初代教授（脳神経外科）に任ぜられた。これをもって本学脳神経外科学教室は完全に独立した教室となった。このときの構成員は助教授遠山光郎、講師小竹源也、助手上田 聖、水川典彦（本学昭和41年卒業）、成瀬昭二、山木垂水、鈴木憲三、修練医藤本正人（本学昭和53年卒業）、太田 努、堀川義治（本学昭和51年卒業）、矢野一郎（昭和大学医学部51年卒業）、研修医田中忠蔵（本学昭和51年卒業）、上口 正、照林宏文、中川善雄、吉野英二（本学昭和51年卒業）であった。

平川は臨床では現在では一般的となっている下垂体腺腫に対する経蝶形骨洞摘出術を先駆的に取り入れ積極的に手術を行った。また海外学会に参加することを自ら身をもって医局員に示し、これに触発され医局の研究も国際的に通ずる仕事が次々と研究され、なかには国内外を通じてその分野の牽引者的存在となったものもある。この当時の主な研究テーマとして、 ^{31}P -NMR spectroscopy から始まる一連の NMR の基礎的、臨床的研究、脳腫瘍に対するインターフェロン治療、悪性脳腫瘍の予後推定と DNA 定量、脳腫瘍における estrogen receptor の研究、悪性脳腫瘍の光化学療法の研究、positron emission tomography を利用した脳循環代謝の研究、dynamic CT による急性期頭部外傷の脳循環の研究、実験的脳血管攣縮に関する



医局，研究室があった旧鴨川病棟をバックに脳神経外科学教室医局員の記念撮影（1985年4月5日撮影）
前列左に初代教授平川公義，2列目左端に2代目教授上田 聖

研究，移植脳における神経可塑性の研究など極めて多方面にわたっていた。さらに，平川は各種脳神経外科関連の地方会の会長に任ぜられたほか，第3回日本外傷研究会(1979年)，第6回日本脳神経外科コンGRESS（1985年）の会長にも任ぜられた。1988年（昭和63年4月）平川は東京医科歯科大学脳神経外科教授に任ぜられ転出した。その後，教室責任者として講師小竹源也がその任にあたった。

1989年（平成元年）3月，社会保険神戸中央病院脳神経外科部長上田 聖が2代目教授（脳神経外科）に任ぜられ，1990年（平成2年）4月，済生会滋賀県病院脳神経外科部長山木垂水が助教授に任ぜられ現在にいたっている。

この間の研究テーマとして，脳腫瘍特に悪性グリオーマの分子生物学的研究，脳腫瘍における細胞骨格蛋白の研究，脳腫瘍磷酸ペントースの研究，PETによる脳腫瘍のシグナル伝達の画像化，それを基礎とした人悪性グリオーマに対する中性子捕捉療法の実施，脳虚血に関する実験的研究，functional MRI や diffusion, perfusion MRI の研究，ラットモデルを用いた脳外傷の基礎的研究，サル，ブタモデルを用いた脳動脈瘤の研究，脳磁図の研究など脳神経外科の臨床から neuroscience の分野にいたるまで極めて幅広く，独創的で国際的な研究が遂行されてきた。

臨床面でもガンマナイフ治療，血管内手術，頭蓋底手術，定位脳手術，術中脳血管撮影，低体温療法など先進的な治療が積極的に行われている。

1995年（平成7年）6月、教室開設20周年を期して同門会が発足し、毎年総会を行っている。現在同門会員の総数は88人で、脳神経外科の常勤医が勤務する関連病院は19をかぞえ、さらに複数の新設が予定されている。

また上田は1996年3月第21回日本神経外傷研究会の会長に選出されており、今後「脳の世紀」と言われている21世紀に向けて京都府立医科大学脳神経外科にはようようたる未来が開けている。

（文責 山木垂水）

1973年（昭和48年）	3月	第1外科学教室の subdivision として脳神経外科疾患の治療、研究、教育を行っていた（京都府立医科大学100年史参照）。
1975年（昭和50年）	4月	脳神経外科学教室開設（第1外科間島進教授教室管理）。講師遠山光郎（本学昭和29卒業）が教室責任者となる。医局および研究室が旧鴨川病棟20号病舎に設けられた。
1976年（昭和51年）	6月	講師遠山光郎（本学昭和29卒業）が助教授（脳神経外科）に昇進。
1978年（昭和53年）	4月	東京大学助教授平川公義（東京大学昭和34年卒業）が初代教授（脳神経外科）に任ぜられた。
1979年（昭和54年）	5月	脳神経外科専属病棟設置（20床）。
1980年（昭和55年）	4月	現外来診療棟6階に医局および研究室が移動
1982年（昭和57年）	3月	助教授遠山光郎が退職。同年4月近江八幡市民病院脳神経外科部長に就任。
1985年（昭和60年）	8月	講師上田 聖（本学昭和38年卒業）が助教授に任ぜられた。
1985年（昭和60年）	9月	C6病舎に脳神経外科病床（32床）が新設された。
1986年（昭和61年）	3月	助教授上田聖が退職。同年4月社会保険神戸中央病院脳神経外科部長に就任。
1988年（昭和63年）	3月	教授平川公義が退職。同年4月東京医科歯科大学脳神経外科教授に就任。
1989年（平成元年）	3月	社会保険神戸中央病院脳神経外科部長上田聖が教授（脳神経外科）に任ぜられた。
1990年（平成2年）	4月	済生会滋賀県病院脳神経外科部長山木垂水（本学昭和47年卒業）が助教授に任ぜられた。

整形外科科学教室

整形外科科学教室が創設されたのは、1948年（昭和23年）であり、1998年（平成10年）の現在までに50年の月日が流れ、その歴史が教室に刻まれている。初代教授の故来須正男と第2代教授の諸富武文までの前半の歴史については、府立医大100年誌にすでに詳しい。

ここでは、教室が先人の蓄積を元にすばらしい発展を遂げた第3代教授榊田喜三郎と第4代教授平澤泰介の時代に焦点をあててその活動を概説する。

榊田喜三郎は1977年（昭和52年）に教授に就任し、整形外科の領域が生体材料の開発、biome-

chanics の発展あるいは画像診断学の革新などによって、大きく変貌しようとしていた時期を先取りし、各種専門クリニックを充実させ、それを back up する基礎研究の確立に力を入れた。そして、学園紛争以来途絶えていた大学院を1979年（昭和54年）から復活させた。また、教室の創設と発展にゆかりのある人々に呼び掛け、1978年（昭和53年）に正式な同門会を組織した。173名で発足した同門会員は、1998年（平成10年6月）で延べ430名を数えるまでに成長している（物故者は24名）。

1989年（平成元年）に後を引き継いだ平澤泰介は、社会的に注目されているスポーツ整形や骨粗鬆症の専門クリニックにいち早く力を入れるとともに、本学で取り組みの遅れていた形成外科の専門クリニックを創設した。また、整形外科とは深いつながりのあるリハビリテーションにも力を入れ、平成2年からは、リハビリテーション部の部長も兼任している。研究面においては、特に基礎研究に力を入れ、積極的に海外交流をはかった。その成果は米国整形外科基礎学会でも高く評価され、その機関誌の advisory board に日本人として初めて選出されている。海外交流の結果、教室から多数の留学経験者が生まれると共に、海外（ペルー、イタリアなど）からの留学生を受け入れた。

平澤教授がカリフォルニア大学、ハーバード大学、そしてドイツのビュルツブルグ大学に留学していたこともあり、現在の各専門外来のチーフは海外留学者が中心となっている。すなわち長谷助教授（脊椎）はドイツの脊椎・脊髄側弯症センター、久保助教授（股関節）はハーバード大学、楠崎講師（腫瘍）はハーバード大学、日下講師（リウマチ）はドイツのフラウンホッフクリニック、高井講師（膝）はカリフォルニア大学、金講師（小児整形、骨折）はメイヨー



米国からの travelling fellow を迎えての、京都大学との合同講演会（1998年4月28日、本学北臨床講義棟）。travelling fellow：前列、平澤教授：2列左から2人目、中村教授（京大）：2列左から3人目

クリニック、野口講師（足）はピッツバーグ大学、井上望（元助手）はジョンズホプキンス大学、渡部助手（骨折）はルイビル大学などである。

学会活動も盛んであり、榊田教授時代には中部日本整形災害外科学会(1981)、日本骨折研究会(1982)、人工関節研究会(1986)、足の外科研究会(1986)、日本整形外科学会基礎学会(1987)、国際外科学会日本部会(1987)が主催され、また平澤教授時代になってからも日本臨床バイオメカニクス学会(1993)、末梢神経研究会(1995)、日本骨関節軟部組織移植研究会(1995)、国際外科学会世界総会(1996)、日本肩関節学会(1997)、中部手の外科研究会(1998)、日本創外固定研究会(1998)、バイオメカニクス世界会議(副会長)(1998)、日米加欧整形外科基礎学会合同会議(1998)、西太平洋整形外科学会(副会長)(1998)、国際外科学会日本部会(1998)などを開催し、今後の予定として中部日本整形外科災害外科学会(1999)、日米手の外科合同会議(2000)、日本手の外科学会(2000)、日本整形外科学会基礎学術集会(2000)などの主催がすでに決まっている。

さらに本整形外科学教室は2000年には創立50周年の節目を迎えようとしているので、多くの同門会会員と共にその準備も目下進行中であり、今後益々の発展が期待されている。

(文責 久保俊一)

<歴代の教授、助教授>

1973年(昭和48年)		教授：諸富武文(昭和33年11月～昭和52年3月) 助教授：榊田喜三郎(昭和43年9月～昭和52年5月)
1977年(昭和52年)	6月	教授：榊田喜三郎(～平成1年3月)
1978年(昭和53年)	6月	助教授：平澤泰介(～平成1年6月)
1989年(平成1年)	7月	教授：平澤泰介
	(平成1年) 12月	助教授：山下文治(～平成4年6月)
1993年(平成5年)	4月	助教授(兼任)：長谷 斉(リハビリテーション部)
1993年(平成5年)	10月	助教授：久保俊一

産婦人科学教室

ステロイドホルモンの構造が決定されたのは約60年ほど前のことであり、まだステロイドが単離される以前より産婦人科では下垂体、卵巣、子宮との基本的関係や、無月経、月経異常、子宮出血、更年期障害といった、今日臨床的に重要な問題となっている問題、そしてそれらへのステロイド療法の応用、さらにはステロイドによる避妊法さえもすでに取り上げられていたことは驚きに値する。

産婦人科学教室では性ステロイドの代謝や作用機構などの研究が行われていたが、これらは1971年(昭和46年)、教授に就任した岡田弘二現名誉教授を中心にして組織的に進められ、この方面の研究は飛躍的に発展した。



「第43回日本産科婦人科学会総会ならびに学術後援会」
平成3年3月23日～26日，国立京都国際会館

ステロイドレセプターによる作用機構の研究は1987年（昭和62年）の玉舎輝彦現岐阜大学教授誕生へとつながり，また1995年（平成7年）岡田弘二教授の後任として就任した本庄英雄現教授らにより行われてきたエストロゲンの代謝やその臨床応用の研究は，エストロゲンによる更年期障害，高脂血症，動脈硬化，骨粗鬆症，アルツハイマー病などの予防といった中高年女性の quality of life の向上という最も現代的な臨床問題や，抗酸化剤としてのエストロゲンによる妊娠中毒症のステロイド療法の研究などへとつながっている。

また性ステロイドの研究は悪性腫瘍の研究へも発展してきた。ホルモン依存性腫瘍である子宮体癌におけるエストロゲン産生酵素，アロマターゼとその阻害剤の研究，黄体ホルモン剤を用いた治療の研究も岡田弘二現名誉教授，山本宝現助教授らにより進められ，1991年（平成3年）に教室が開催した第43回日本産科婦人科学会の会長講演で岡田弘二教授が，また平成9年の第49回日本産科婦人科学会の教育講演で本庄英雄現教授が，その時点での最新の成果を報告した。現在も分子生物学的手法を用いて悪性，良性腫瘍のレセプターの構造や変異，それらによる性ステロイドの作用機構の違いの解析，さらにその臨床的応用の研究が進められている。

これら教室の性ステロイド研究の発展経過を見ると性ステロイドを天然ホルモンのアゴニストとして利用することはほぼ研究しつくされた感があるが，現在は中高年女性などを対象とし血管や神経組織など性器以外への作用の研究，さらには抗ホルモン剤，抗癌剤のほか，薬物としてのステロイド剤へと発展しつつある。しかしそれらの状況の中で一方では避妊薬として使用した場合により少量で作用が強く，より副作用が少ない化合物の開発とその臨床応用の努力

も依然として続けられている。また抗癌剤、抗菌薬、麻酔薬、鎮痛薬などの方向への研究もみられるし、さらには抗癌剤とステロイドを結合させたものなど、いわゆる targeting 療法といったものなどへの応用も検討されている。いずれにせよ性ステロイドの研究は現在転換期にあることはまちがいない、21世紀は産婦人科領域における性ステロイド研究が大きな山を乗り越えて、臨床応用の面でもさらにいろいろな方向に大きく飛躍すると考えられ、教室の研究もさらに発展が期待される。

教室の生殖内分泌の研究はこれら性ステロイドの研究を中心に進められてきたが、一方生殖医療技術の進歩も大きく、本学でも倫理委員会の審議をへて昭和63年以降体外受精、胚移植、顕微受精といった研究がすすめられている。この方面の研究は今後のさらなる技術の発展とともに、倫理的な問題が常に重要な問題になっている。

近年新興、再興感染症が問題となっているが、1996年（平成8年）はペニシリンが開発されて50年に当たる。教室では徳田教授のころより感染症研究がテーマとして取り上げられてきた。これらは抗菌剤の開発に伴い進められ産婦人科領域の術後感染症や周産期感染症を対象にして基礎的、臨床的に行われてきた。またエイズが大きな問題となっているが、1984年（昭和59年）ごろからはクラミジア感染症を中心に STD を感染症研究の対象として取り上げ、特に垂直感染による母子感染の予防プログラムを他にさきがけて提唱してきた。

1984年（昭和59年）本学附属病院に周産期診療部が開設された。それまでの周産期領域の研究はこれを一つの契機としてさらに ME 関係を中心に、画像診断や胎児心拍の解析などがすすめられた。現在さらに分子生物学的手法を応用した胎児診断、さらには胎児治療といった研究へと発展している。

1773年（昭和48年）	11月	府立医科大学創立100周年学術講演会
1773年（昭和48年）	12月	京都産婦人科医会創立25周年記念式典
1975年（昭和50年）	8月	岡田教授ニューヨーク州立大学生化学部門客員教授として6ヶ月間渡米
1979年（昭和54年）	8月	山田一夫名誉教授逝去
1981年（昭和56年）	11月	岡田教授開講10周年記念式典
1982年（昭和57年）	3月	周産期診療部竣工、岡田教授周産期診療部長兼任
1983年（昭和58年）	4月	附属看護専門学校に助産学科再開設、本年より15名が入学
1984年（昭和59年）	6月	東山秀聲助教授心筋梗塞にて急逝（6月10日）
1984年（昭和59年）	9月	産婦人科学教室が創立100周年を迎えた。府立医科大学が1872年医学教育を始めた後、12年遅れた1884年9月、助教諭であった武部隆太郎が教諭に就任し満100年である。9月15日都ホテルにて創立100周年記念式典を行い、林田悠紀夫京都府知事、加藤俊日本産科婦人科学会会長、森山豊日本母性保護医協会会長、澤崎千秋元教授が祝辞を述べた。
1985年（昭和60年）	9月	病院第1期工事、新病棟完成、産科病棟、婦人科病棟新しくなる。
1985年（昭和60年）	11月	澤崎千秋元教授脳腫瘍にて急逝
1987年（昭和62年）	4月	岡田弘二教授大学附属病院長および小児疾患施設長
1987年（昭和62年）	5月	玉舎輝彦助教授、岐阜大学産科婦人科教授に就任のため転出
1987年（昭和62年）	7月	配偶子卵管内移植（GIFT）開始

1988年（昭和63年）	4月	体外受精，胚移植を開始
1989年（平成元年）	11月	病棟第2期工事完成産婦人科外来が新規移転
1991年（平成3年）	3月	第43回日本産科婦人科学会を岡田教授が会長として開催 岡田弘二教授開講20周年
1992年（平成4年）	10月	日本内分泌学会秋季大会開催
1993年（平成5年）	4月	京都府立医科大学医療技術短期大学部創設 岡田教授初代学部長兼任
1995年（平成7年）	3月	岡田弘二教授定年退職
	4月	本庄英雄教授就任
1996年（平成8年）	3月	岡田京都府立医科大学医療技術短期大学学部長退職
1996年（平成8年）	4月	顕微受精倫理委員会承認

小児科学教室

1973年（昭48）3月に20余年間小児科教授職にあった中村恒男が定年退官して名誉教授となり、同年6月に助教授の楠智一が教授に就任した。そしてこれに伴い島田司巳講師が助教授に昇格した。1974年（昭49）4月の教室スタッフは楠教授，島田助教授，澤田淳講師，尾内善四郎，今宿晋作学内講師，助手5名であり，この年の入局者は5名であった。1975年（昭50）に中村名誉教授が滋賀医科大学副学長兼小児科教授に就任したのに際し，島田は滋賀医科大学小児科助教授に転任したが，その後島田は1978年（昭53）12月に中村の後任として滋賀医科大学小児科教授となっている。島田の移動に伴い，講師澤田淳が後任の助教授に就任した。当時の外来には特殊外来として神経，肥満児，循環器，腎臓，血液外来があった。楠は研究面では長年の肥満に関する臨床研究を進展させ，monosodium glutamate (MSG) 肥満マウスを用いた研究によって当教室を小児肥満研究のメッカとするとともに，1979年（昭54）から4年間2期にわたって病院長に就任し，病棟の再編成や小児疾患研究施設の設定に貢献した。また澤田は尿濾紙による神経芽細胞腫のマスキングを確立し，この功績により1980年（昭55）に母子保健奨励賞を授賞した。講師尾内は1980年（昭55）に退職して金沢医科大学に移動し，さらに愛知医科大学に移動した後，1988年（昭63）に本学小児疾患研究施設小児内科教授に就任した。小児科学教室では1975年（昭50）に血液外来を担当していた乾明彦助手（昭42卒）を白血病で，1978年（昭53）にも中田和育（昭44卒）を胃ガンでと，続けて若い教室員を失う不幸を経験したが，今宿はそれを契機に白血病や悪性細網症の臨床的研究を進め，それらの治療法を進展させた。1982年（昭57）6月に周産期センター，同年12月に附属小児疾患研究施設が開設され，教授楠は小児疾患研究施設長に就任した。また福原宏一，土井康生両助手がNICU担当となった。以来今日まで，本学NICUは京滋の新生児医療の中心的役割を担い，市中の診療所・病院のみならず隣接の大学病院からも新生児あるいは母胎の搬送を受け入れ続けている。そしてNICU開設以来，当教室は一般病棟兼救急外来とNICUのために連日2名の当直医を配置し続けてい

る。教授楠は1986年(昭61)3月に定年退官して名誉教授となり、4月に福井医科大学副学長に就任した。同年7月に助教授澤田淳が教授に就任、同年10月に講師衣笠昭彦が助教授となった。1987年(昭62)5月に名誉教授中村恒男は滋賀医科大学副学長および病院長を退任し、同年11月に勲二等瑞宝章を叙勲したが、1988年(昭63)2月に死去した。また名誉教授楠智一は1989年(平1)3月に福井医科大学副学長を退任した。教授澤田淳は1990年(平2)4月に本学医療センター長に就任し、以後2年間、医療センターの発展に寄与した。滋賀医科大学小児科助教授に移動していた大矢紀昭(昭39卒)は1991年(平3)4月に宇治保健所長兼務の当教室助教授となったが、1996年(平8)4月に滋賀医科大学医学部看護学科教授となった。1993年(平5)7月に講師杉本徹は宮崎医科大学小児科教授に就任した。1994年(平6)4月には府立与謝の海病院小児科が開設され、以来3名の助手が派遣され、府北部の地域医療に貢献している。1996年(平8)4月に学内講師井上文夫は京都教育大学体育学科教授に就任した。澤田が教授に就任してから10年目に当たる1996年(平8)までに、特殊外来は腎臓、腫瘍、神経、肥満児、血液、アレルギー、代謝内分泌、未熟児外来に増え、1996年(平8)4月時点で、スタッフは澤田淳教授以下、衣笠昭彦助教授、吉岡博、竹内義博講師、松村隆文、木崎善郎学内講師の他、助手が本院に4名、伏見診療所(旧分院)に2名、保健所・与謝の海病院など医療センター所属の8名の計20名で、さらに大学院生16名、修練医7名、2年目の研修医1名、そしてこの年の入局者は11名という大所帯となっている。しかし1997年(平9)3月に伏見診療所が閉鎖され、診療所勤務の2名の助手は4月より暫定措置として本院に配置替えされているが、近日中に退職を余儀なくされている。また1997年(平9)4月に衣笠昭彦は向陽保健所長に就任して併任助教授となり、同時に吉岡博が助教授に、松村隆文が講師に昇格した。

1973年(昭和48年)	3月	教授(小児科学)中村恒男が定年退職し名誉教授に推薦された。
1973年(昭和48年)	6月	助教授楠智一(本学昭和22年卒業)が教授(小児科学)に任ぜられた。
1973年(昭和48年)	7月	講師島田司巳(本学35年卒業)が助教授(小児科学)に任ぜられた。
1975年(昭和50年)	4月	名誉教授中村恒男が滋賀医科大学副学長兼小児科教授に任ぜられた。 (昭和62年5月まで副学長兼病院長)
1975年(昭和50年)	4月	助教授(小児科学)島田司巳が滋賀医科大学助教授に転出のため退職した。(1978年12月教授になっている)
1975年(昭和50年)	4月	講師澤田淳(本学昭和36年卒業)が助教授(小児科学)に任ぜられた。
1977年(昭和52年)	1月	名誉教授齋藤二郎が死去した。
1979年(昭和54年)	3月	講師(小児科学)大矢紀昭が滋賀医科大学助教授に転出のため退職した。
1979年(昭和54年)	4月	教授(小児科学)楠智一が院長に補せられた。(2期4年間)
1982年(昭和57年)	6月	周産期センター開設
1982年(昭和57年)	12月	小児疾患研究施設開設, 施設長 教授(小児科学)楠智一
1985年(昭和60年)	1月	講師今宿晋作(本学38年卒業)が助教授(小児疾患研究施設内科部門)に任ぜられた。
1986年(昭和61年)	3月	教授(小児科学)楠智一が定年退職し名誉教授に推薦された。

1986年（昭和61年）	4月	名誉教授楠智一が福井医科大学副学長に任ぜられた。（平成1年3月まで）
1986年（昭和61年）	7月	助教授澤田淳（本学昭和36年卒業）が教授（小児科学）に任ぜられた。
1986年（昭和61年）	10月	講師衣笠昭彦（本学昭和45年卒業）が助教授（小児科学）に任ぜられた。
1988年（昭和63年）	2月	名誉教授中村恒男が死去した。
1990年（平成2年）	4月	教授（小児科学）澤田淳が医療センター所長に就任した。（平成4年3月まで）
1991年（平成3年）	4月	滋賀医科大学助教授大矢紀昭（本学昭和39年卒業）が助教授（宇治保健所長併任）に任ぜられた。
1993年（平成5年）	6月	講師（小児科学）杉本徹が宮崎医科大学教授に転出のため退職した。
1994年（平成6年）	4月	与謝の海病院に小児科が開設された。
1996年（平成8年）	3月	助教授（小児科学）大矢紀昭が滋賀医科大学教授に転出のため退職した。
1996年（平成8年）	3月	講師（小児科学）井上文夫が京都教育大学教授に転出のため退職した。
1997年（平成9年）	4月	助教授（小児科学）衣笠昭彦が京都府向陽保健所長に転出した。（助教授併任）
1997年（平成9年）	4月	講師吉岡博（本学昭和49年卒業）が助教授（小児科学）に任ぜられた。

眼科学教室

谷 道之教授時代：昭和48年～昭和51年

谷 道之教授時代には初代助教授根来良夫，第2代助教授深見嘉一郎，講師の足立興一らが教室を支えた。谷 道之は日本において初めて網膜のフルオレセイン血管撮影を行い，糖尿病性網膜症の第一人者であった。しかし教授就任の翌年に始まった学園紛争は熾烈を極め，谷は院長として精力的に対処，病院管理学への造詣を深めた。

著書には『小眼科書（昭和40年）』，分担著述に『外傷性頸腕症候群（昭和44年）』，『糖尿病眼底（昭和45年）』，『糖尿病のすべて（昭和46年）』などがある。また，谷は昭和45年5月に神戸の第74回日眼総会で「眼底写真による知見—蛍光眼底写真—」を宿題報告し，昭和51年5月には長崎の第80回日眼総会でシンポジウム「糖尿病性網膜症臨床像について及び Prediabetes について」を担当した。赤木好男は昭和51年6月に第19回日本コンタクトレンズ学会を京都で開催した。

糸井素一教授時代（昭和52年4月～平成3年3月）

糸井素一教授時代には初代助教授深見嘉一郎，山本敏雄（第2代），赤木好男（第3代），講師の足立興一（初代），山本敏雄（第2代），井上節（第3代），赤木好男（第4代），前田耕志（第5代）らが教室を支えた。初代講師の足立興一は活躍が惜しまれる中，昭和55年3月に病

没した。糸井は設備面の充実と多くの専門外来の設置を計った。昭和55年にはシノプトフォア、角膜移植用電動トレパン他、多数の臨床機器が、昭和56年9月には眼科第二研究室に電子顕微鏡（JEM-100S型）が設置された。昭和57年には眼科手術室に天井懸架手術用顕微鏡（ツァイス社製）、超音波白内障手術装置（キャピトロン社製）が、外来にはアルゴンレーザー光凝固機が設置された。専門外来は斜視、糖尿病、緑内障、白内障、角膜、網膜、コンタクトレンズ、神経眼科、アレルギー、色覚、暗順応、ブドウ膜などが設置された。研究面では形態学と視覚生理学の2つの研究班が作られた。糸井の専門であった角膜の研究、中でも円錐角膜の研究・治療は特に有名であった。また、糸井は眼科医療工学（眼科ME）や白内障研究にも研究領野を広げ、眼科ME学会の本部を本教室に置き、白内障研究所の所長を長く務めた。昭和59年には糸井は月刊雑誌『あたらしい眼科』を創刊した。本雑誌は最新眼科医療を伝える雑誌として全国に広く浸透し、今日に至るまで本教室に引き継がれている。国際的活動も盛んになり、昭和59年3月には糸井素一、小玉裕司が国際協力事業団からの命令でスリランカを訪問し、角膜移植術及び角膜熱形成術の技術移転に協力した。また、赤木好男は昭和56年から3年間と昭和61年からの1年間米国国立眼研究所（NEI）に留学した。昭和59年6月には京都府立医科大学眼科教室開講百周年記念祝典が挙行された。著書には『レーザー視覚検査法、レーザー医学—基礎と臨床—（昭和55年）』、『ユニット眼科学（昭和60年）』、他に谷道之、稲富昭太、深見嘉一郎、可児一孝、山本敏雄、赤木好男、佐々本研二との分担著述の『小眼科学（平成3年）』などがある。

昭和53年5月に第23回国際眼科学会が京都で開催され、弓削経一が第3回国際斜視会議のLocal Organizing Committeeを、谷道之が第3回代謝異常眼疾患、第1回小児眼科国際合同シンポジウムを、糸井が第1回国際角膜研究会をそれぞれ主催した。昭和54年5月に糸井がシンポジウム「弱視の病態・生理」と足立興一が特別講演「視覚の先天性・後天性」を第29回弱視斜視学会で講演し、6月に糸井が第22回日本コンタクトレンズ学会で「角膜形状の自動診断とコンタクトレンズ」を特別講演した。昭和58年5月に糸井が「角膜疾患の診断と治療—円錐角膜を中心として—」を日本眼科学会総会で宿題報告した。昭和58年12月には第48回中部眼科学会を主催した。昭和63年3月に糸井は第92回日本眼科学会総会シンポジウムで「角膜疾患治療・最近の進歩」の講演を、7月にインドネシア眼科学会で「白内障の治療」を特別講演した。平成2年には第93回日本眼科学会を本教室で主催した。

木下 茂教授時代（平成4年4月～現在）

木下茂教授時代は助教授の赤木好男（初代）、前田耕志（第2代）、池田恒彦（第3代）や、講師の前田耕志（初代）、池田恒彦（第2代）、横井則彦（現在）、溝部恵子（現在）らを初めとした多くのスタッフによって運営されてきた。木下茂は教授就任後まず、関連病院懇話会の開

催、府立医大眼科新聞刊行、明交会（眼科学教室同窓会）理事会の開催などを定期的に行うとともに、医局スタッフ会議の充実などを計り、教室内外の親密化と機能化を精力的に行った。また、教育や研究の向上にも心血を注ぎ、関西眼疾患研究会を発足させ、毎週内外から講師を招いた特別講演と年2回の府立医大眼科フォーラム（現在は京都眼科フォーラム）の開催をこの研究会主催で始めた。国際学会での研究発表や英文論文などの数は年々上昇し、平成5年には3名の中国人留学生在が、平成8年には1名の英国人留学生在が本教室で研究を積むなど、国際的活動は飛躍的發展を遂げた。また、これまで講師、助手、大学院生を含め12名を海外に送っており、海外留学活動も盛んとなった。診療面では、診療の専門化と外来・入院での一貫した主治医制を導入した。専門外来は角膜、円錐角膜、アレルギー、ドライアイ、コンタクトレンズ、屈折矯正手術、緑内障、網膜、未熟児、糖尿病、眼循環、ブドウ膜、斜視、調節など、多岐にわたる。木下は角膜移植の第一人者であるとともに、京都ライオンズクラブの協力により京都地域のアイバンクの提供眼数の増加のための活動や啓蒙活動などを行い、アイバンクの充



第42回 明交会・総会（1972年9月23日）
（稲富稔、柏井忠安、佐古博愛3先生の喜寿と富井清先生の御快復をお祝いして）

実にも情熱を傾けている。また、木下は屈折手術にも造詣が深く、日本でもいち早くエキシマレーザーによる角膜屈折矯正術を手がけた。尚、平成6年に京都府立医科大学眼科学教室は開講110周年を迎えた。

平成7年1月には第19回角膜移植学会、第19回角膜カンファランスを主宰した。平成9年11

月には第33回日本眼光学学会・第12回眼科 ME 学会を、平成14年には眼科3 大学会の一つである日本眼科手術学会を主催する予定である。

全国的な学会での特別講演・宿題報告・シンポジウム講演はこれまで16ほどあり、学会活動は盛んで、木下の著書も10編以上ある。それぞれ詳細については紙面の都合上割愛する。

1973年（昭和48年）	7月	谷道之教授，附属病院病院院長に就任
1975年（昭和50年）	7月	谷道之教授，附属病院病院院長退任，附属医療センター所長就任
1975年（昭和50年）	12月	根来良夫助教授退職
1976年（昭和51年）	1月	深見嘉一郎，助教授に昇任
1976年（昭和51年）	7月	根来良夫，京都第一赤十字病院へ赴任
1977年（昭和52年）	6月	糸井素一，順天堂大学眼科学助教授より本学眼科学教授に就任
1978年（昭和53年）	1月	根来良夫，京都市立病院眼科部長に就任
1978年（昭和53年）	4月	稲富昭太，滋賀医科大学眼科学教授に就任 深見嘉一郎助教授，西独ミュンヘン工科大学留学（昭和53年10月帰国）
1981年（昭和56年）	3月	谷道之，名誉教授に就任 深見嘉一郎助教授退職し京都第一赤十字病院眼科部長就任
1981年（昭和56年）	4月	山本敏雄，助教授に昇任
1983年（昭和58年）	4月	深見嘉一郎，京都第一赤十字病院退職，福井医科大学眼科学教授に就任
1987年（昭和62年）	12月	弓削経一名誉教授，病没
1988年（昭和63年）	6月	（稲富昭太，滋賀医科大学副学長に就任）
1990年（平成2年）	3月	山本敏雄助教授退職，山本眼科医院院長に就任
1990年（平成2年）	4月	赤木好男，助教授に昇任
1992年（平成4年）	4月	木下茂，大阪大学眼科学講師より本学眼科学教授に就任
1993年（平成5年）	3月	（深見嘉一郎，福井医科大学眼科学教授退職） （稲富昭太，滋賀医科大学眼科学副学長退職）
1993年（平成5年）	6月	赤木好男助教授退職，福井医科大学眼科学教授に就任
1993年（平成5年）	7月	前田耕志，助教授に昇任
1995年（平成7年）	6月	前田耕志助教授退職，前田眼科病院副院長に就任
1995年（平成7年）	9月	池田恒彦，助教授に昇任

皮膚科学教室

教室の変遷

本学にも例外なく吹き荒れた大学紛争とその後遺症の時期を経て、1973年（昭和48）教授外松茂太郎が会頭として第24回日本皮膚科学会中部支部総会・学術大会を主宰したのを契機に、ようやく研究、診療に対する意欲が甦ってきた。外松は以前からの教室の主な研究テーマであった角化症の中とくに重要な疾患である乾癬をとりあげ、組織化学、電顕、オートラジオグラフィ、組織培養など当時の有力な手技を駆使してその病態解明と治療法の研究に取り組み、多くの業績を著した。また、皮膚悪性腫瘍についても新たに動物実験を加えて、実験系を確立するとともに、凍結療法などの治療法に関して新しい知見を加えた。これは、助教授上田恵一

によって、後に教授として就任した福井医科大学の皮膚科講座で発展的に引き継がれた。

一方、治療面では皮膚外科と皮膚アレルギーの二つのテーマを設け、皮膚外科に関しては当時多くの皮膚科診療科が外科的治療は他科への方針を打ち出す傾向がみられる中で、外松教授の方針で皮膚疾患は皮膚科で治療するという原則が貫かれた。この方針は今も受け継がれ、皮膚悪性腫瘍の研究や治療の発展の基になった。さらに、特筆すべきは本学にまだ存在しない形成外科の開設への足がかりとすべく、学内講師大島良夫が昭和大学形成外科への国内留学を終えて、1977年（昭和52）に新設された京都第二赤十字病院形成外科の部長として転出し、現在も本学における形成外科領域の診療を側面から支えていることである。皮膚アレルギーに関しては接触皮膚炎、蕁麻疹、薬疹などの原因検索や抗原除去療法を行うなど難治な疾患の診断と治療に積極的に取り組んだ。また、ウイルス感染症の研究においても優れた業績があり、「ウイルス性皮膚疾患に対するインターフェロンの基礎的研究並びに臨床応用」に関する成果は1987年（昭和50）にヨーロッパで開催されたシンポジウムで外松自ら報告し、高い評価を得た。

教室の構成員は、1973年（昭和48）には教授以下11名であったものが、次第に増加し、昭和54、5年には20名を越え、教育、研究、診療の三部門とも教授以下充実したスタッフで支えられた。そんな中、1983年（昭和58）には上田が福井医科大学の教授として就任し、講師安野洋一が助教授に昇任した。1985年（昭和60）3月、外松は停年退職し、4月に名誉教授の称号を受けた。

1985年（昭和60）8月、安野が教授に昇任した。同年10月、講師加賀見潔が助教授に昇任し、翌年4月から医療センター人事により宮津保健所長に転出して3年間にわたり併任助教授として教室に貢献した。さらに外松教授の停年と同時に関連病院における皮膚科の新設、再開や福井医大への出向など中堅の助手が大幅に移動したため、安野が教授就任後もしばらくは13～15名の若手中心の教員で推移した。ために、当分の間は教育と診療を重視してスタートせざるを得ず、従来からの皮膚外科とアレルギー性皮膚疾患に重点をおくことになった。前者については、12年間で悪性黒色腫50数例、血管肉腫11例の手術を行うなど評価すべき実績を残してきた。後者については、新たにアトピー外来を設けてアトピー性皮膚炎の診療に力を注ぎ、重症度の設定と予後との関連について新しい知見を著す一方、京都府の行政と一体となって府下の保健所を中心に患者の個別指導や治療と予防についての啓蒙活動を続け、成果を上げてきた。

教室員も1990年（平成2）頃から次第に増加して、1996年（平成8）には30名に達した。同時に研究スタッフもようやく充実し、とくに安野が念願とした皮膚腫瘍、角化症、皮膚アレルギーの三分野では国際的な評価に耐えうる成果を上げてきた。すなわち、助教授岸本三郎らは免疫組織化学を用いて創傷治癒機構に関与する諸因子の解明と治療への応用に関する研究により、 α b-cAMPの外用剤が医薬品として発売される道を開き、さらに現在、アポトーシスの出現と創傷治癒および腫瘍の伸展との関連について研究が続けられている。講師山西清文らは角

化症をターゲットにした分子病態学的研究に精力的に取り組み、まず、表皮の角化関連酵素として重要と考えられるトランスグルタミナーゼ1について、cDNAのクローニングとゲノム構造の決定を世界に先駆けて成し遂げた。さらに、同遺伝子の発現制御に関する研究を推進するとともにノックアウトマウスの作製にも成功し、遺伝性角化異常症の遺伝子治療研究への応用につながる成果として国の内外で注目を集めている。また、講師平野真也らはアトピー性皮膚炎をはじめとするアレルギー性皮膚疾患について、疫学的、病態生理学的研究および培養ランゲルハンス細胞を用いての免疫学的研究に取り組み、成果を上げている。

学会活動としては1991年（平成3）に第9回日本ヒト細胞学会、1993年（平成5）に第23回日本皮膚アレルギー学会、1994年（平成6）に第45回日本皮膚科学会中部支部総会・学術大会を安野が会長および会頭として主宰した。1997年（平成9）8月、安野は日本皮膚科学会理事に選出されたが、これは教室の伝統と現在の力を背景にしたものと考えられ、21世紀へ向けてのさらなる教室の発展が期待される。

（文責 安野洋一）

1968年（昭和43年）	7月	外松茂太郎助教授，教授に昇任。
1968年（昭和43年）	11月	上田恵一講師，助教授に昇任。
1983年（昭和58年）	4月	上田恵一助教授，福井医科大学教授に就任。 中安清客員講師，福井医科大学助教授に就任。 安野洋一講師，助教授に昇任。
1985年（昭和60年）	3月	外松茂太郎教授，定年退職，4月名誉教授に推薦。 西陣病院顧問に就任（1992.6～93.3病院長）。
1985年（昭和60年）	8月	安野洋一助教授，教授に昇任。
1985年（昭和60年）	10月	加賀見潔講師，助教授に昇任。
1986年（昭和61年）	4月	加賀見潔助教授，宮津保健所長に転出（助教授併任）。 岸本三郎講師，助教授に昇任。
1989年（平成元年）	5月	加賀見潔助教授（併任），京都第一赤十字病院皮膚科部長に転出。

泌尿器科学教室

泌尿器科学教室は1964（昭和39）年に故小田完五初代教授の下に皮膚泌尿器科学教室より分離独立して発足した。教室創設当時の動向は、京都府立医科大学百年誌に詳述されている。1973年（昭和48）年以降は小田以下7～8名が腎機能障害、泌尿器腫瘍などをテーマに臨床、研究に励んでいた。しかし小田は1975（昭和50）年6月に任期を残し逝去した。その後1976（昭和51）年1月には東北大学から渡辺泷を第2代教授に迎えたが、その時点での医局員は教授を含めて総勢8名であった。1997（平成9）年5月現在では総勢34名と、渡辺が就任した当時と比べて教室員の増加には目を見張るものがある。

教室員の数だけでなく研究面においても、種々の研究課題において日本だけでなく世界的に評価されている。とくに渡辺のライフワークとでもいうべき超音波医学においては、自ら実用化した経直腸的前立腺超音波診断装置が世界的に普及し、現在では前立腺疾患の診断に必須の検査になっている。また、この装置を応用した世界初の前立腺集団検診車「ドルフィン号」は1981（昭和56）年12月に完成し、その後日本全国に広がる前立腺集団検診の先駆けとなった。そして、1994（平成6）年4月より渡辺を班長とした「前立腺がんの集団検診の妥当性に関する研究」を研究課題とする厚生省がん研究助成金渡邊班が発足し、国家事業としての前立腺集団検診に向けて研究中である。

尿路結石症においては、1976（昭和51）年より微小発破を用いた尿路結石破碎術の研究を開始し、1992（平成4）年に微小発破による膀胱結石破碎器、1995（平成7）年には尿管結石破碎装置が相次いで新医療用具として製造承認され、尿路結石の非侵襲的治療に新しい風を吹き込んだ。また、1981（昭和56）年には斉藤が世界で初めて1期的に行う経皮的腎尿管切石術に成功し、現在では上部尿路結石症の必須の治療法となっている。

夜尿症においては、1985（昭和60）年より膀胱内圧脳波終夜同時測定を開始し、夜尿症を3病型に分類することによる体系的治療を行っている。この研究も世界的に注目されており、渡辺は1994（平成6）年より毎年 International Enuresis Research Center Workshop に日本からただ一人招待されている。

また最近では、骨盤内静脈うっ滞症候群（IVCS）という新しい病態の発見や、超音波断層法を用いた膀胱重量（UEBW）の測定による新しいウロダイナミクス検査法の開発、自家末梢血幹細胞移植（PBSCT）を用いた精巣腫瘍に対する超大量化学療法など、さまざまな分野で画期的な研究が進行している。

このような研究成果を報告する学会も、当教室主催で多数開催された。主なものをあげると、1980（昭和55）年日本超音波医学会第36回研究発表会、1986（昭和61）年第36回日本泌尿器科学会中部総会、1991（平成3）年日本超音波医学会第58回研究発表会、1992（平成4）年第1回日本腎泌尿器疾患予防医学研究会、1993（平成5）年 First Seminar for The International Cooperative Study of Diagnostic Ultrasound in Prostatic Cancer、1994（平成6）年第17回日本がん疫学研究会・第3回日本腎泌尿器疾患予防医学研究会併催、Second Seminar for The International Cooperative Study of Diagnostic Ultrasound in Prostatic Cancer、1995（平成7）年第3回日本がん検診・診断学会などである。

このような研究・学会活動が認められ、1986（昭和61）年には大西克実、1996（平成8）年には沖原宏治が日本泌尿器科学会坂口賞を受賞した。また1990（平成2）年には大西、1991（平成3）年には斉藤雅人、1997（平成9）年には飯田明男が日本超音波医学会菊池賞を受賞した。また渡辺は、1994～1995（平成6～7）年度の日本超音波医学会会長であり、1998（平成10）

年より3年間アジア超音波医学学術連合 (AFSUMB) の会長, 2000 (平成12) 年より3年間世界超音波医学学術連合 (WFUMB) の会長を務める予定になっている。最後に臨床面においては, 外来患者は延べ人数で1973 (昭和48) 年の8,184名より1996 (平成8) 年19,776名, 入院患者は1973 (昭和48) 年7,606名から1996 (平成8) 年15,561名と飛躍的に増加しており, 手術も1996 (平成8) 年は年間359例行っている。泌尿器科外来は1989 (平成元) 年に2階南より4階の新館に移設された。泌尿器科病棟は年代順に10号, 22号, 16号と他科との混合病棟を移動し, 1989 (平成元) 年より新館のC3号が泌尿器科単科病棟で総数45ベッドを有している。

今後とも研究・臨床のさらなる発展をめざして, 教職員一同力を合わせていく所存である。

1975年 (昭和50年)	6月	教授 (泌尿器科学) 小田完五が死去した。
1976年 (昭和51年)	1月	東北大学講師渡辺決 (東北大学昭和35年卒業) が教授 (泌尿器科学) に任ぜられた。
1984年 (昭和59年)	6月	助教授 (泌尿器科学) 三品輝男が退職した。
1984年 (昭和59年)	7月	大江宏 (本学昭和41年卒業) が助教授 (泌尿器科学) に任ぜられた。
1993年 (平成5年)	3月	助教授 (泌尿器科学) 大江宏が退職した。
1993年 (平成5年)	4月	斉藤雅人 (東北大学昭和48年卒業) が助教授 (泌尿器科学) に任ぜられた。
1996年 (平成8年)	9月	助教授 (泌尿器科学) 斉藤雅人が明治鍼灸大学教授に転出のため退職した。
1996年 (平成8年)	10月	内田睦 (本学昭和53年卒業) が助教授 (泌尿器科学) に任ぜられた。

耳鼻咽喉科学教室

大学が百周年を迎えた時, 教授水越 治は就任後3年を経過していたが, 安野友博がすでに助教授に昇任しており, その後, 1975年 (昭和50年) に斎藤 等, そして1983年 (昭和58年) に斎藤助教授が福井医科大学の耳鼻咽喉科学教室の初代教授に転出後に橘 正芳が1988年 (昭和63年) まで助教授を勤めた。この25年の歴史の経過の途中で, 教室は75周年を迎えるとともに, 福井医科大学に斎藤 等教授以下の多くの優秀なスタッフを, また, 大阪医科大学に竹中洋教授を送り出すというイベントを経験した。また, 全国的に医科大学の増設が軌道に乗り, 研究機関と研究者の母数が増加して, 学会活動が次第に活性化しだした。教授水越は, 1972年 (昭和47年), 日本耳鼻咽喉科学会総会で宿題報告「内耳有毛細胞の病態」を担当したことにより, 教室の研究体制や設備などはすでに整いを見せていたが, より充実させるため, 文部省科学研究費, 企業からの研究費の獲得にエネルギーを費やさねばならなかった。科学の進歩とともに, 耳鼻咽喉科学においても研究領域の専門別進歩が著しくなり, 各種の研究会が新たに誕生し, それぞれ学会へと成長を始めた。教室では, 1972年 (昭和47年) に日本内耳生化学研究会 (現在, 日本耳科学会) と日本平衡神経科学会, 1973年 (昭和48年) に頭頸部腫瘍研究会 (現

在, 日本頭頸部腫瘍学会), 1977年(昭和52年)に日本音声言語医学会, 1980年(昭和55年)に日本鼻副鼻腔学会(現在, 日本鼻科学会), 1983年(昭和58年)に耳鼻咽喉科臨床学会などを教授水越が会長として担当し, それぞれの学会の組織を強化するとともに会誌の発行などを軌道に乗せ, 学会の充実発展に貢献した。この間の1982年(昭和57年)には教室開講75周年を迎えたが, 中村文雄名誉教授喜寿祝賀会を兼ねて祝賀会が11月28日, 京都ホテルで開催された。教室では, 開講25周年, 50周年に, それぞれ記念誌を発行しているが, これらの復刻版と75周年の記念誌を新たにまとめ配布した。

教授水越は1976年(昭和51年)以降, 日本耳鼻咽喉科学会理事, 副理事長, 監事などを勤め, 1977年(昭和52年)に本学附属病院長, 1979年(昭和54年)に同学長, 文部省医学視学委員(7期14年), 1982年(昭和57年)に厚生省医療関係者審議会委員(国家試験の制度改善専門委員), 1985年(昭和60年)に日本学術会議(第13期)会員, 続いて63年第14期会員(第7部副部長, 脳死問題を初めて取り上げた「医療と社会」特別委員会委員長)などに選出された。また, 文部省, 日本学術会議や医学教育振興財団などによりイギリス, フランス, ドイツ, スウェーデンなどの医学教育調査をたびたび依頼され, また, WHOによる国際医学教育会議を1986年(昭和61年), 京都で開催するなど教室を離れた要件の処理に追われた。1988年(昭和63年)3月をもって, 教授水越は停年退職し, 明治鍼灸大学の学長へ, 同時に橘助教授も退職し同学教授に就任した。

水越教授の退任後には, すでに頭頸部腫瘍診療の我国のみならず世界的な権威であった慶應義塾大学助教授の村上泰を教授として迎えた。村上教授着任後の教室の基本方針は, 担当責任者を中心として各研究室ごとに充実発展を図ること, 24施設からなる教育関連病院における耳鼻咽喉科診療の充実を図ること, 及び, 同窓会各位との病診連携を重視することの三点であった。いわゆる出張病院の改善については, 若手教室員の教育出張効果を高めるとともに教育関連施設を含めた総合的な業績が府立医科大学としての評価を受けるべきとの判断に立つもので, 年平均5名の新規入局者を確保しつつ, その構想は現在なお着実に進行中である。各研究室は, それぞれの領域の最先端を行く自覚と自負を持って研鑽し, 頭頸部腫瘍学は村上教授, 安田範夫講師, 河田 了講師らが, 耳科学は小宮精一講師, 小野寿之講師, 立本圭吾講師らが, 鼻科学は竹中 洋助教授, 水越文和講師, 出島健司講師らが, 喉頭科学は久 育男助教授らが継続担当し, 内外の学会において活躍しつつある。また, 耳鼻咽喉科学会における日本の代表としての役割を果たすべく, 日本気管食道科学会認定医大会(1993年:平成5年), 日本頭頸部外科学会(1994年:平成6年), 日本喉頭科学会(1995年:平成7年), 日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会(1996年:平成8年), 耳鼻咽喉科臨床学会(1997年:平成9年)を教授村上が会長として主宰した。また, 教授村上は多くの学会活動において重責を担っているが, なかでも, 現在, 日本気管食道科学会理事長として同学会の今後の更なる発展に尽力しているところであ

る。125周年の本年は村上教授就任10年の節目に当たり、業績をまとめて今後の更なる発展への礎とするべく計画中である。

(文責 久 育男)

1975年(昭和50年)	1月	助教授(耳鼻咽喉科学)安野友博が退職。
1975年(昭和50年)	2月	講師(耳鼻咽喉科学)斎藤 等が助教授に昇任。
1983年(昭和58年)	3月	助教授(耳鼻咽喉科学)斎藤 等が国立福井医科大学教授に転出のため退職。
1983年(昭和58年)	4月	講師(耳鼻咽喉科学)橘 正芳が助教授に昇任。
1988年(昭和63年)	3月	教授(耳鼻咽喉科学)水越 治が停年退職, 名誉教授に。明治鍼灸大学学長に。助教授(耳鼻咽喉科学)橘 正芳が明治鍼灸大学教授に転出のため退職。
1988年(昭和63年)	9月	慶應義塾大学助教授村上 泰(慶応大昭和35年卒)が教授(耳鼻咽喉科学)に着任。
1989年(平成元年)	4月	講師(耳鼻咽喉科学)竹中 洋が助教授に昇任。
1996年(平成8年)	3月	助教授(耳鼻咽喉科学)竹中 洋が大阪医科大学教授に転出のため退職。
1996年(平成8年)	6月	講師(耳鼻咽喉科学)久 育男が助教授に昇任。

精神医学教室

1973年(昭和48年)当時は第7代教授加藤伸勝が教室を主宰していたが、昭和40年代前半に吹き荒れた大学紛争も収束に向かい、入局員は着実に増加し、教室としては安定した時代が続いていた。この時期には生化学、生理学分野での基礎的な研究に加え、アルコール依存に関する社会精神医学、老年期痴呆の臨床、さらには司法精神医学など幅広い分野での研究業績があげられた。

1983年(昭和58年)加藤伸勝は東京都立松沢病院長として転出、かわって中嶋照夫が助教授から教授に就任した。中嶋は1963年(昭和38年)大阪大学大学院を修了後、大阪大学高次神経機能研究所、大阪第二警察病院を経て前年当科助教授に就任。この間一貫して中枢神経の生化学的研究を行ってきた。教授就任後も助教授能登直らとともにアミン前駆物質や神経ペプチドの精神薬理学的研究を継続するとともに、精神病理学を中心とした従来の診断に対し、生物学的な視点を導入しバランスの取れた臨床診断学を強調した。また教室員を海外に留学させ、神経科学における新しい方法論、認知療法、サイコエデュケーションなどを積極的に取り入れてきた。

1989年(平成元年)には京都府福祉部高齢者対策室長に転出した能登直に代わり、助教授として中村道彦が東京都立精神医学総合研究所から着任、精神分裂病における認知機能に関する精神生理学的研究を始めた。

平成3年からは思春期、老年期、リエゾンコンサルテーション、強迫性障害などの専門外来をあいついで新設し、多様化する精神医学のニーズに応えようとしている。それと共に各専門外来のグループで臨床研究が盛んに行われるようになってきた。思春期グループでは神経性無食欲症の経口液体栄養を用いた行動療法および家族療法を、老年期グループでは老年期痴呆の画像診断や痴呆性老人の社会精神医学的研究を、リエゾングループでは他科入院中の患者の精神医学的問題、特にせん妄状態についての研究を、強迫性障害グループでは強迫性障害の評価尺度の作成を行っている。

この間の精神医療の変遷の中で重要な事項として1987年（昭和62年）に行われた精神衛生法から精神保健法への改正があげられる（施行は昭和63年）。宇都宮病院事件により精神病院内での精神障害者に対する強制労働や暴行事件の実態が明らかにされ、患者の人権擁護の観点から本改正となったものである。これにより精神医療においても患者の人権が、一層重視されるようになり、患者の意思に反する強制的な医療に関しては精神保健医の判断が必要になった。このため大学での卒後教育においても精神保健指定医の資格取得が大きな目標として掲げられるようになった。また精神保健法は1995年（平成7年）には精神障害者の社会復帰などの福祉的な視点を加味して一部改正され、精神保健福祉法と改称された。本学でもそれまでの入院中心の医療から社会復帰を目指す医療に転換、老朽化していた精神科病棟（25号病棟）を平成7年から8年にかけて改修し、それまで閉鎖、開放の2病棟であったものを閉鎖開放混合の1病棟に縮小するかわりに入院患者のリハビリテーションやレクリエーションを目的とした多目的ルームを新設、入院患者のリハビリテーションやサイコエデュケーションを行っている。また人口の高齢化が進むなか、大きな社会問題となってきた痴呆性老人対策として平成3年から老人性痴呆診断センターを開設し、痴呆性老人の診断や介護・処遇方針の決定を行ってきている。

1996年（平成8年）中嶋照夫が定年退官し、京都府立精神保健福祉総合センター所長に就任した。後任として講師福居顕二が第9代の教授として就任した。福居は本学大学院を1983年（昭和58年）修了後、向精神薬の中枢機序に関する組織化学的研究を行ってきたが、他にも覚醒剤・有機溶剤依存の臨床や老年期痴呆をテーマとした臨床研究などに取り組んでいる。さらに生物学的精神医学にとどまらず精神病理学との接点を模索し、より臨床に即した幅広い分野での研究の発展をめざしている。

1973年（昭和48年）から1997年（平成9年）の25年間は教室としては大学紛争の後に続く定期であったが、社会的には精神医療を取り巻く環境が大きく変動していった時期であった。当教室においても時代の要求にこたえるべく自己改革をおこない、研究・臨床・教育のバランスの取れた教室をめざしてきているところであるが、教室に課せられている期待は大きく更なる発展が望まれるところである。

1973年（昭和48年）	8月	助教授（精神医学）浮田義一郎が洛東病院副院長に転出する（助教授併任）。 講師（精神医学）高橋三郎が助教授に任ぜられた。
1977年（昭和52年）	4月	助教授（精神医学）高橋三郎が滋賀医科大学教授に転出のため退職した。
1977年（昭和52年）	5月	講師（精神医学）門林岩雄が助教授に任ぜられた。
1980年（昭和55年）	4月	教授（精神医学）加藤伸勝が医療センター長に補せられる。
1982年（昭和57年）	4月	大阪第2警察病院中嶋照夫が助教授（精神医学）に任ぜられた。 助教授（精神医学）門林岩雄が城陽心身障害者センター附属病院院長に転出した（助教授併任）。
1983年（昭和58年）	8月	教授（精神医学）加藤伸勝が退職し名誉教授に推薦された。
1983年（昭和58年）	9月	名誉教授（精神医学）加藤伸勝が東京都松沢病院院長に就任した。 助教授（精神医学）中嶋照夫が教授に任ぜられた。
1983年（昭和58年）	10月	講師（精神医学）能登直が助教授に任ぜられた。
1984年（昭和59年）	4月	助教授（精神医学，併任）門林岩雄が滋賀県立短期大学教授に就任した。
1989年（平成元年）	4月	助教授（精神医学）能登直が京都府福祉部高齢者対策室長に転出した（助教授併任）。
1989年（平成元年）	9月	東京都立精神医学総合研究所中村道彦客員講師（精神医学）が助教授に就任した。
1996年（平成8年）	3月	教授（精神医学）中嶋照夫が退職し名誉教授に推薦された。
1996年（平成8年）	4月	名誉教授（精神医学）中嶋照夫が京都府立精神保健福祉総合センター所長に就任した。
1996年（平成8年）	7月	講師（精神医学）福居顕二が教授に任ぜられた。

放射線医学教室

1973年（昭和48年）から1997年（平成9年）の25年間はX線CT，核医学（RI），磁気共鳴画像（MRI）が登場し，いわゆる“画像診断”が日常臨床に不可欠なものとなり，放射線医学がきわめて重要な位置を占めるようになった時代である。したがって，その中心をなす放射線医学教室における診療・教育・研究もめまぐるしい変遷を遂げた時代と言えよう。この間の1992年（平成4年）3月までは村上晃一教授が，同年5月からは前田知穂教授が放射線医学教室を主宰した。

(1) X線CT：1979年（昭和54年）には東芝EMIのEMI1010が導入され，本学におけるX線CTの幕開けとなった。1981年（昭和56年）には東芝製全身用CT装置TCT60A-27およびTCT60A-30が購入され，全身のX線CT撮影が可能な時代となり，1987年（昭和62年）には東芝製全身用CT装置TCT60A-EX，1994年（平成6年）にはシーメンス社製全身CT装置ゾマトムプラスSが導入され，現在に至っている。EMI1010による頭部CTの登場は日本人の死因の2位または3位であった脳血管障害の診断（特に脳梗塞と脳出血の鑑別）に大きなimpactを与えたことは言うまでもない。その後X線CTによる全身の検索が可能となり，臨床各科の

診断法として定着し、現在に至っている。

(2)ガンマカメラ：核医学はこの25年間に長足の進歩を遂げ、放射線医学の一翼を担うようになった。1973年（昭和48年）に島津社製シンチスキャナー、1975年（昭和50年）に島津・ヌクレアーシカゴ社製ガンマカメラが購入され、in vivo 核医学検査が開始された。1981年（昭和56年）に島津・シーメンス社製2検出器型ガンマカメラが導入されたが、甲状腺、肝、Gaシンチグラム、レノグラムが中心の時代である。1986年（昭和61年）には東芝社製GCA901Aが導入され、planar像のみでなく断層像(SPECT)の撮像が可能となり、特に循環器領域での診断精度が飛躍的に向上した。平成7年にはPicker社製Prism 2000XPが導入され、多くの核医学検査にSPECTがルーチン化されるようになった。この間数多くの新しいイメージング製剤が登場し、それぞれの臨床的有用性が示されている。核医学検査は血流・機能・代謝画像を提供し、疾患の有無診断のみでなく、質的診断に貢献していると考えられる。核医学の中でも循環器・腎・腫瘍の分野における当教室の臨床研究はわが国で指導的役割を果たしてきた。

(3)MRI：今日の画像診断に大きなimpactを与えた磁気共鳴画像(MRI)の装置は1987年（昭和62年）にシーメンス社製マグネトームH15、1989年（平成2年）に島津社製SMT150-Xが導入された。脳外科・神経内科・整形外科領域をはじめ、全ての診療科でMRIなしには診療を行えないと言っても過言でないほど本検査の重要性は増してきた。研究面においてもMRSおよびfunctional MRIの分野では国際的な活躍を繰り広げた。

(4)治療：放射線治療は手術療法、化学療法とともに悪性腫瘍の治療法の一つとしてこの25年間大きな役割を果たしてきた。これまで用いてきたコバルト遠隔大量照射装置RTGS-2DMに



遠隔放射線診療

代わり、平成5年より三菱製放射線治療装置 ML-15MDX, ML-6M (ライナック) により放射線治療を行っている。この間、放射線生物学的な面での放射線治療の理論的な裏付けに関する基礎的研究が田中紀元助教授を中心として展開された。腫瘍に対する放射線増感効果に関する数多くの実験的研究(放射線と抗癌剤, hyperthermia の併用等)が繰り返され、国内外で高い評価を得た。

(5) PACS と Teleradiology : 画像診断の発達による診断精度の著しい向上は、一方では過疎地域と都会地の医療の差、膨大なフィルムの管理、医療現場における費用対効果比といった問題点を生じてきている。前田知穂教授は平成4年の就任当初より、「次世代型医用画像管理、診断ネットワークシステムの開発と地域医療への応用に関する研究」を展開してきた。CT や MRI などのデジタル画像情報を CRT で診断し、画像ネットワークを病院内で用いる場合を PACS (Picture Archiving and Communication System) という。このネットワークを院外に拡張し、遠隔地の診療施設と中核病院間を電話回線 (ISDN) で結び、遠隔地からの画像の伝送に対し中核病院で診断報告書を作成し伝送したり、施設間で画像を共有し症例検討やコメントを附加するなど、より良い画像診断や病診連携などを目指したのが遠隔放射線診療 (Teleradiology) である。当教室では平成5年より京都府下や滋賀県の医療施設等から MRI や CT 画像等が伝送され、それぞれの病院にレポートを作成し結果を報告するシステムを開発、実施してきた。本システムは医療の延長線の福祉に対しても遠隔ケアシステムとして応用されることが期待され、今後もこの分野の研究・診療に力を注いでゆく予定である。

次の25年に向けて：今後大きく変貌すると予想される医療環境の中で、医学における放射線医学の役割を認識し、画像診断・放射線治療・核医学・遠隔放射線診療に関する臨床・教育・研究を如何にバランスよく成し遂げていくかが教室としての次の25年の課題と考えられる。

(文責 杉原洋樹)

1971年 (昭和46年)	4月	村上晃一教授。
1974年 (昭和49年)	1月	前田知穂助教授に任命。
1980年 (昭和55年)	3月	前田知穂退職。
1980年 (昭和55年)	4月	前田知穂高知医科大学放射線科教授に任命さる。
1980年 (昭和55年)	10月	西口弘恭助教授に任命。
1985年 (昭和60年)	9月	西口弘恭第二日赤に移る。
1985年 (昭和60年)	10月	宮崎忠芳助教授に任命。
1987年 (昭和62年)	3月	宮崎忠芳宇治病院に移る。
1987年 (昭和62年)	4月	山下正人助教授に任命。
1992年 (平成4年)	3月	村上晃一定年退職。
1992年 (平成4年)	5月	前田知穂教授に任命。
1992年 (平成4年)	12月	山下正人第二日赤に移る。
1993年 (平成5年)	1月	田中紀元助教授に任命。
1994年 (平成6年)	3月	田中紀元定年退職。
1995年 (平成7年)	6月	杉原洋樹助教授に任命。

麻酔学教室

1966年（昭和41年）に初代宮崎正夫教授のもと大学院生も含め僅か8名で日本で第8番目の麻酔学講座としてスタートした京都府立医科大学麻酔学教室も、1973年（昭和48年）には創立7年目を迎えていた。この年の前後からそれまで全く無かった新卒の医局員がやっと入局してくるようになったが、まだまだそのまま麻酔科に留まる医局員は当時少なく、マンパワーの充実という点ではほど遠いものがあった。されど現教授の田中義文が1973年（昭和48年）7月に入局、また1974、75年（昭和49、50年）にも3人ずつ入局者があり、この中からも現香川医科大学手術部助教授の横野諭が麻酔学の研究を続けることとなった。また1976年（昭和51年）には現在京都第二日本赤十字病院の麻酔科部長、救急部長、そして重責の副院長を兼任する依田健吾が整形外科から転じて麻酔科に入局し、この後10年余に亘り臨床麻酔科医としての位置づけや社会人としての麻酔科医はいかにあるべきかなどを、臨床指導者として、医局長として若い麻酔科医に指導する中核を担った。研究面では、初代助教授として教室を指導してきた藤田俊夫の後を受けた小栗顕二が1973年（昭和48年）に助教授となり臨床にのみ追われることの多かった教室員に、臨床薬理・臨床生理としての麻酔学の面白さを示し、同年に京都大学薬学部出身の奥田（旧姓坂口）を迎えたこともあってリベラルな宮崎正夫教授の元に俄然活気づき始めた。さらに「文部省科学研究費を真剣に獲得する方法」についての取り組みを研究員に伝え、麻酔科の風物詩である毎年秋の科研費獲得合戦の基盤が作られた。この伝統と実績は現在まで継承され続けており、ちなみに今年度も総額3000万円を越す科学研究費を教室にもたらしている。1979年（昭和54年）以降は毎年数名の入局者があり、このころから生涯の仕事として麻酔学を捉える人が急速に増えてきた、同時に日赤病院をはじめとする京都の中心病院にも常勤医として麻酔医を派遣することが可能となってきたため、世の中のニーズと共にまさに黎明期から発展期へと飛躍が始まった。1986年（昭和61年）4月には宮崎正夫教授が日本麻酔学会長となり、第33回日本麻酔学会総会を国立京都国際会館（宝が池）にて開催することになった。平成2年3月宮崎正夫教授が退官し国立舞鶴病院に院長として赴任、その後を受けて田中義文が同年11月に二代目教授となった。このころから世の中の国際化に伴い海外留学を希望する医局員が多くなったが、田中教授の方針は「行かせてやる、行かせてやりたい」であり就任僅か7年の間に大学院生も含め延べ13名が海外留学を体験することができた。田中麻酔学教室にはこれらの留学組が新しい知見を持ち込み、近代生理学を駆使した田中教授の研究を充実させ、また、細川助教授らの手術侵襲と免疫系、橋本助教授らのバイオを用いたARDSの病因解明の研究、溝部講師による組み換え遺伝子操作を用いた麻酔薬等の作用機序の解明、伊吹講師の痛覚情報処理における細胞内情報伝達機構の解明の試みさらに臨床では重見講師によるカンデー利用

の小児前投薬の開発など広範囲にわたった研究が展開されている。

<構成員の主な変遷>

昭和48年2月 藤田俊夫元助教授京都第2赤十字病院麻酔科部長退職医院開業, 10月小栗頭二助教授就任。昭和51年9月10周年記念式典。昭和55年宮崎正夫教授他京都府医師会京都医学賞受賞, 5月田中義文助手ミシシッピ医学センター留学。藤田俊夫元助教授毎日文化賞受賞。昭和56年宮崎正夫教授京都市長賞受賞, 7月田中義文内講師京都府立与謝の海病院麻酔科就任。昭和57年4月宮崎正夫教授看護専門学校長兼任。昭和58年4月小栗頭二助教授香川医科大学麻酔・救急医学講座教授就任。横野諭助手, 小松久男助手, 横野淳子助手香川医科大学麻酔・救急医学講座へ移籍。田中義文講師就任。6月麻酔学教室同門会発足。昭和59年4月依田健吾講師就任, 7月田中義文助教授就任。12月須貝順子(旧姓塚脇)講師就任。昭和61年4月宮崎正夫教授第8回日韓合同麻酔科学シンポジウム会長。7月須貝順子講師近江八幡市民病院麻酔科部長就任。10月依田健吾講師京都第二赤十字病院麻酔科部長就任。光藤努講師就任。

昭和62年光藤努講師洛和会音羽病院麻酔科部長就任。昭和63年光藤努国立呉病院麻酔科医長就任。平成1年重見研司助手日本麻酔学会山村記念賞受賞, 平成2年3月宮崎正夫教授退官。4月宮崎正夫名誉教授国立舞鶴病院院長就任, ICU開設橋本悟講師副部長就任, 田中義文助教授他第14回京都医学会勤務医部学術奨励賞受賞, 11月田中義文教授就任。平成3年1月夏山卓講師就任, 4月田中義文教授集中治療部部長兼任, 細川豊史助教授就任。橋本悟集中治療部(ICU)助教授就任(麻酔学教室兼務)。6月細川豊史助教授デュッセルドルフ大学留学(文部省在外研究員)。同門会にて宮崎賞設立, 7月同門会誌発行, 9月夏山卓講師綾部市立病院麻酔科医長就任。平成4年4月福井道彦ICU講師就任, 8月橋本悟集中治療部(ICU)助教授カリフォルニア大学サンフランシスコ校留学(文部省在外研究員), 10月光藤元講師山口県立中央病院麻酔科部長就任。平成5年4月福井道彦ICU講師から麻酔科講師就任。溝部俊樹講師就任, 7月畑中哲生助手ジョーンズホプキンス大学留学, 9月伊吹京秀学内講師イリノイ州立大学留学, 10月伊吹京秀講師就任。平成6年4月溝部講師ICU講師就任, 7月佐和貞治助手カリフォルニア大学サンフランシスコ校留学, 9月溝部講師スタンフォード大学留学。平成7年1月依田京都第二赤十字病院麻酔科部長救急部長兼任同4月副院長就任。10月木下隆助手カルガリー大学留学。平成8年重見研司講師就任。平成9年1月原田助手カリフォルニア大学留学。

<参考資料>

宮崎正夫教授退官記念教室業績集 1990年

京都府立医科大学 麻酔学教室同門会誌 第1号 1991年

第2号 1992年

第3号 1993年

第4号 1994年

第5号 1995年

第6号 1996年

1973年（昭和48年）	2月	藤田俊夫元助教授京都第2赤十字病院麻酔科部長退職医院開業
1973年（昭和48年）	10月	小栗顕二助教授就任
1983年（昭和58年）	4月	小栗顕二助教授香川医科大学麻酔・救急医学講座教授就任
1984年（昭和59年）	7月	田中義文助教授就任
1990年（平成2年）	3月	宮崎正夫教授退官
1990年（平成2年）	4月	宮崎正夫名誉教授国立舞鶴病院院長就任
1990年（平成2年）	11月	田中義文教授就任
1991年（平成3年）	4月	田中義文教授集中治療部部長兼任 細川豊史助教授就任
		橋本悟集中治療部（ICU）助教授就任（麻酔学教室兼務）
1991年（平成3年）	6月	細川豊史助教授デュッセルドルフ大学留学（文部省在外研究員）
1992年（平成4年）	8月	橋本悟集中治療部（ICU）助教授カリフォルニア大学サンフランシスコ校留学（文部省在外研究員）

臨床検査部，臨床検査医学教室

臨床検査部の発足は1959（昭和34）年の臨床検査科創設にさかのぼる。当時は附属病院内各所にあった検査所を中央化し，仁木偉差夫助教授を部長に三宅清雄講師を副部長として発足した。その後，検査科は診療・治療に必要な検査を正確，精密，効果的に行う様に整備され，また臨床検査に関する教育と研究をも行う中央組織として位置づけられた。

<1973～1988年の臨床検査部>

初代教授に島田信男（臨床検査部長）が選ばれ〔1973（昭和48）年〕，福井巖助教授（副部長）と共に臨床検査部は発展した。技術職の中で主任技師（課長補佐）に箕浦健が任命され（1980年），2年後に技師長となった。業務は3係制の元に運営された。

当時の検査機器として生化学自動分析装置日立400と500，テクニコン SMA と II 型，血液自動分析器ヘマログなどが整備され，診療科の要望に対応した。

中央診療棟が1982（昭和57）年に竣工し，その2階に臨床検査部の検体検査部門が設置され，新たに HIRAS コンピューターに接続された726型生化学自動分析装置，自動白血球分類装置などが導入された。また輸血検査は新設された輸血部（中川雅夫部長，水谷昭夫副部長）にて施行された。RI 検査室は1985（昭和60）年に竣工した C・D 病棟の1階に設置され，放射線科の管轄となり臨床検査部より所属替えとなった。検査部の業務はプランチラボとしてこども病院

(1985年設立), ICU (1988年設立) の検査室とも担当した。

学会は島田信男教授のもとで第21回日本臨床病理学会近畿支部総会(1978年), 第2回日本臨床病理学会特別例会(1982年)が開催された。日本臨床病理同学院資格認定試験は一般検査学(島田信男教授主催, 1976, 1977年), 病理学(島田信男教授主催, 1978, 1979年), 循環生理学(北村和人講師主催, 1978, 1986, 1987年), 血液学(中西忍講師主催, 1987, 1988年)が開催された。

臨床検査医学講座は1987(昭和62)年に設置され, 検査業務の管理と指導, 研究, 卒前教育ならびに大学院教育を行う教育研究組織として発展することとなった。福井巖助教授は1987年に停年となり, 島田信男教授は翌1988年3月に停年となり名誉教授となった。

<1988～現在の臨床検査部>

1988(昭和63)年4月に吉村 學が第二内科学講師より臨床検査医学教授・臨床検査部長に就任し, 診療科と臨床検査部とが協調する検査体制作りがなされた。11月に臨床生理学検査情報処理システムが完成し, 心電図や脳波などのコンピューター化がなされた。以降4年間にわたり臨床検査部と病院病理部のコンピューター化がなされた。測定値が直ちに病棟の端末器に表示され, 診断・治療の向上を図る迅速検査体制が確立した(1991年: 受付改装, 1992年: 一期電算工事完成, 1993年: 二期電算工事完成)。引き続き病院のコンピューター化を行う為の医療情報部が設立され, 部長に吉村 學, 副部長に高橋伯夫が選ばれ, 臨床検査部が中核となって病院の電算化を進めた(1991年)。臨床検査の24時間勤務体制作りは徐々に進展した。緊急検査室機器の整備(1988年), 土日祭日の検査体制施行(1989年), 代休・当直制施行の一環として少人数部門解消の為の生化学と血清検査室, 一般と細菌検査室の合併(1990年)を行い, 長年の念願であった臨床検査部の24時間業務体制が1991(平成3)年11月より施行された。院内感染対策のための院内感染対策専門委員会が組織され(1990年), 臨床検査部が中心となって活動する事となり, 委員長に吉村 學, 副委員長に藤田直久が選出された。細菌検査室は1992年より菌同定に遺伝子検査を導入した。病理検査室は病院病理部として独立した[1990(平成2)年]。

検査部の機器はコンピューター化と共に整備され, 生化学自動分析装置(736型, 7250型, 80FRなど), 血球自動計測装置(STKR, STKSなど)が導入されたが, 予算の関係で自動搬送装置は導入不可能であった。

高橋伯夫は1990(平成2)年に助教授に任ぜられて臨床検査医学教室と臨床検査部の発展に尽力し, さらに1993(平成5)年には関西医科大学病態検査学講座教授に任ぜられた。

羽瀨義純講師は公益信託臨床病理学研究賞(1996年), 西村真人講師はファイザー循環器病研究優秀賞(1996年), 湯浅宗一係長は日本臨床病理同学院緒方富雄賞(1995年)をそれぞれ受賞した。仁木偉彦元臨床検査部長は勲三等旭日中綬章, 箕浦健前技師長は勲六等瑞宝章の叙勲

に輝いた（1996年）。

学会は吉村 學教授のもとで 5th International Conference on Peripheral Dopamine（1994年）、第33回日本臨床病理学会近畿支部総会（1990年）、第6回日本臨床化学会近畿支部総会（1995年）、第23回日本医学会総会の医用機器展示会（1991年）、第6回日本内分泌学会生涯教育集会（1996年）、がそれぞれ開催された。

日本臨床病理同学院 2 級技術士資格認定試験は循環生理学（中西正講師主催で1992年、1993年）、緊急検査（吉村 學教授主催で1997年、1998年）が開催された。

（文責 吉村 學、島田信男）



- 1973年（昭和48年） 11月 臨床検査部教授が発令され初代に島田信男教授が任ぜられた。
- 1974年（昭和49年） 6月 仁木偉瑳夫教授は国立八日市病院院長に就任。
- 1981年（昭和56年） 4月 3係長制が発足。
- 1982年（昭和57年） 3月 中央診療棟の竣工に伴い、検査機器（726, Hiras）が整備された。
- 1982年（昭和57年） 4月 技師長に箕浦健が任ぜられた。
- 1982年（昭和57年） 4月 輸血部（中川雅夫部長、水谷昭夫副部長）が創設された。
- 1985年（昭和60年） 4月 RI 検査室が臨床検査部より放射線科に移動。
- 1987年（昭和62年） 4月 臨床検査医学教室が開講。
- 1988年（昭和63年） 3月 島田信男教授が定年となり名誉教授に。
- 1988年（昭和63年） 4月 吉村學が臨床検査医学教授、臨床検査部長に任ぜられた。
- 1988年（昭和63年） 11月 臨床生理検査情報処理システムが設立された（病棟2期工事完成）。
- 1989年（平成元年） 9月 臨床検査部創立30周年記念祝賀会が開催された。
- 1990年（平成2年） 2月 院内感染対策専門委員会設立され委員長に吉村學が任ぜられた。
- 1990年（平成2年） 4月 高橋伯夫が助教授に任ぜられた。
- 1990年（平成2年） 4月 病院病理部が設立された [土橋康成部長（助教授）]。
- 1990年（平成2年） 11月 浜田（曾山）浩吉助教授の葬儀が行われた。
- 1991年（平成3年） 3月 検査部受付と採血場の拡大・整備が行われた。

1991年（平成3年）	4月	医療情報部が設立された。吉村學部長，高橋伯夫副部長に任ぜられた。
1991年（平成3年）	11月	臨床検査部の24時間勤務体制が施行された。
1992年（平成4年）	6月	臨床検査部のコンピューター化の第1期工事が終了した。
1992年（平成4年）	12月	遺伝子診断検査が開始された（細菌検査室）。
1993年（平成5年）	3月	臨床検査部と病院病理部のコンピューター化の第2期工事が終了した。
1993年（平成5年）	5月	臨床検査部と病棟間はコンピューター化された（フルオープン）。
1993年（平成5年）	5月	高橋伯夫助教授が関西医科大学教授に任ぜられた。
1994年（平成6年）	6月	技師長に鈴木紘一が任ぜられた。箕浦健は定年にて退職した。
1996年（平成8年）	7月	病原性大腸菌O-157感染検体のため多忙となった。
1996年（平成8年）	11月	元検査部長仁木偉瑛夫（勲三等旭日中章）と前技師長箕浦健（勲六等瑞宝章）が叙勲に輝いた。

歯 科

<小野進一郎歯科部長時代>

1973年（昭48）の主な構成員は山本（現明海大学歯学部教授），増田，北川，岡田助手で，研究活動は本学の特別研究生制度にて基礎教室にて行っていた。

1974年（昭49）2月に教授（初代歯科部長）本永七三郎逝去。同年4月講師（第5代歯科部長）小野進一郎が助教授昇進。主な構成員は増田，北川，岡田，妹尾助手で，岡田助手が衛生学教室特別研究生を許可された。

1976年（昭51）11月に小野助教授が教育功労者（京都市教育委員会）の表彰を受ける。主な構成員は増田，北川，岡田，平岡助手で，平岡助手は法医学教室特別研究生を許可された。

1980年（昭55）4月に根本辰郎が講師に採用され，副部長を命ぜられた。同年6月に講師（第3代歯科部長，京都大学名誉教授）美濃口玄逝去。主な構成員は根本講師，増田，西村，加藤，小林助手であった。

1981年（昭56）10月，助教授（歯科部長）小野進一郎逝去，教授（歯科）に昇進。主な構成員は根本講師，増田，加藤，吉田，今井助手であった。

<堀 亘孝歯科部長時代>

現堀教授が，1982年（昭57）1月に第6代目歯科部長（助教授）として就任し，同年8月に武田元一（現公立甲賀病院歯科口腔外科部長）が講師に採用され，翌年4月副部長に命ぜられた。主な構成員は松田学内講師，増田，上松，福島助手で，当時の主要研究テーマは根尖病巣の組織学的研究であった。

1986年（昭61）4月に森本伊智郎が助手に採用され，副部長を命ぜられた。同年6月には歯科医局開設70周年記念緑缶会総会が開催された。

1987年（昭62）4月に築谷康二が講師に採用され，副部長を命ぜられた。主な構成員は上松，

斉藤、金村、川居助手で、主要研究テーマは根尖病巣の生化学的ならびに組織化学的研究であった。この当時より現在の体制が作り始められ現在に至っている。

1989年（平成）12月には歯科診療室が現在のB棟4階に移転した。主な構成員は築谷講師、



写真上 平成7年12月2日第7回日本口腔科学会近畿地方部会

写真下 なお本会の設立総会は、昭和6年6月7日に本学歯科学教室本永七三郎教授を第一代会長として本学で開催された。

上松、金村、奥田、高橋助手で、主要研究テーマは歯根嚢胞の生化学的研究、低出力レーザーの基礎的研究で、本研究テーマに文部省科学研究費の補助が受けられ、各種研究機器の整備が開始された。

1991年（平3）4月に他の公立医科大学に先がけ歯科臨床研修医制度が導入され、5名の研修医が登院。同年6月には歯科医局開設75周年記念緑伍会総会が開催された。同年10月には歯科部長室が現在の外来診療棟1階に移転し、研究室も数年前より整備され第1、2、3、4研究室ならびに医員室が割り当てられ現在に至っている。

1992年（平4）の主な構成員は築谷講師、金村学内講師、奥田、荒木、森助手で、主要研究テーマは歯根嚢胞の生化学的ならびに組織化学的研究、低出力レーザーの基礎的研究であった。

1994年（平6）4月助教授（歯科部長）堀 亘孝が教授に昇進し、同年6月緑伍会主催教授就任祝賀会が開催された。主な構成員は築谷講師、金村学内講師、奥田、福島、肥後助手であった。

1995年（平7）12月には日本医学会の第31分科会である日本口腔科学会の第7回日本口腔科学会近畿地方部会を堀教授が会長にて当科主管にて開催、本学会の前身は1918年（大7）に創設された日本歯科口腔科学会であり、特に本学歯科学教室（本永七三郎教授）が1931年（昭6）6月に近畿歯科口腔科学会設立総会を本学にて主管開催しており、本学歯科の伝統の深さに、医局員一同感慨致しました。

1996年（平8年）6月には歯科医局開設80周年記念緑伍会総会が開催された。主な構成員は築谷講師、金村学内講師、奥田、福島、馬場助手で、主要研究テーマは歯根嚢胞の生化学的ならびに組織化学的研究、低出力レーザーの基礎的研究、顎関節の基礎的研究であった。

現在の医局の状況であるが、まず、診療面では堀教授を始めとし31名の医局員が在籍しており、外来患者の平成8年度の年間初診患者数3,757名、同延患者数25,911と現在も増加傾向にあり、入院患者は、ほぼ満床状態で経過しております。また、関連病院は現在21病院と順調に充実し地域医療に微力ながら貢献しております。研究面では歯根嚢胞と根管処置の関係について組織化学的ならびに生化学的検索を研究の主テーマとして研究活動を行っており、その成果にて臨床科でありながら、現在までに3名の医局員が本学より学位記を獲得しており、現在も3名の医局員が学位記を目指し研究活動を行っております。次に、教育面では本学5年生に自由科目にて歯科口腔科学の講義、各地の看護学校ならびに衛生士学校の講義を堀教授、築谷講師、金村学内講師が担当しております。

最後に、今後大学の御理解、御支援のもとに、東京大学につき1916年（大5）に創設された歴史と伝統を重んじ、さらには医科大学の中の歯科という特殊性を生かし、より新しい充実と発展が期待される。

- 1974年（昭和49年） 4月 講師（歯科部長）小野進一郎（本学昭和25年卒業）が助教授（歯科）に任ぜられた。
- 1981年（昭和56年） 10月 助教授（歯科部長）小野進一郎逝去，教授（歯科）に昇進した。
- 1982年（昭和57年） 1月 大阪歯科大学助教授堀亘孝（大歯昭和37年卒業）が助教授（歯科）に任ぜられ，歯科部長を命ぜられた。
- 1989年（平成元年） 12月 歯科診療室B棟4階に移転。
- 1994年（平成6年） 4月 助教授（歯科部長）堀 亘孝（大歯昭和37年卒業）が教授（歯科）に任ぜられた。